
ストリートストーリィ

ツル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストリートストーリー

【Nコード】

N8127C

【作者名】

ツル

【あらすじ】

路上ライブを行う2人組、リョウとケイ。音楽の素人ながらも、考え、学び、挫折しながらも成長していく。「自分の思いを人に伝える」このことを意識して、2人は今日も路上ライブに出掛ける。

1 この日から…（前書き）

実話混じりな、想像混じりな話です。

1 この日から…

ストリートストーリー

この話は、登場人物のリョウとケイのコンビが路上ライブを通して、色々なことを学び、考え、成長していく物語です。
ヨロシクオネガイシマス。

ジャンジャカツカツジャカジャンジャカツカツジャカ
(やっぱこの音はいいなあ)リョウは思った。

バイトで貯めた金でギターを買った。63000円のエレアコ(エレキギターよりのアコギ)だ。

今度はアンプにさして弾いてみる。ジャラーン
さつきよりも音がでかい。

(かっけ〜)リョウは思った。

高2の冬からギターを弾き始め、もう2年が過ぎた。一通りのコードは覚えた。やっている人から見れば普通だが、素人から見ればうまいと言われるくらいになった。

リョウはそのくらいのレベルだった。

ブーブー

マナーモードにしていたケータイが振動している。
メールだ。

見ると、ケイからだった。

ケイは、高校の時の同級生だ。

メールの内容を見た。

「あのさ〜、ギター教えてくれない？」

ケイもギターをやっていた。しかしそれは高校の時点で、もうやめた
とリヨウは思っていた。
メールを返信する。

「いいよ！とりあえず家行くわ。」

リヨウはギターを持ってケイの家に向かった。

ケイの街はリヨウの住む町から電車で3駅の場所だった。乗車時間
15分位だった。

ガタンゴトンガタンゴトン
電車の中でメールを送る。

「14時10分頃着きます。」

メールが返ってくる。

「わかった。車で迎えいくわ。新幹線側の方で待ってて。」

電車が着き、言われた場所に向かう。
しばらくすると、車が前に止まった。

ケイの車だった。

ガチャ

後部座席を開ける。

ケイ

「ごめん、待った？」

リヨウ

「いや、今きたとこ。」

ギターを後部座席に置き、助手席に座る。

ケイ

「俺の家でやるけどいい？」

リヨウ

「うん。いいよ。」

(ケイちゃん家初めて行くなあ) リヨウは思った。
車はケイの家に向かった。

ガラガラ

戸を開ける。

リヨウ

「おじやましませーす。」

返事なし。

ケイ

「あがつて。」

1階の居間に行く。ソファーと机が置いてあった。

2人は座った。

ギターを取り出すリヨウ。

ケイ

「ギターの教本とか買ったんだけど、何していいかわかんなくて。」

リヨウ

「ケイちゃんはどうしたいの？」

考えるケイ。

ケイ

「…とりあえずコードとか覚えたいね。」

リヨウ

「なら、曲を覚えたほうがいいね。そっちの方が早い。」

ケイ

「そうか。どの曲がいいかな？」

リヨウ

「教本に載ってるのでいんじゃないかね？とりあえず弾いて、わかんないコードが出たら見て覚えて、1曲弾けることだね。そしたらその曲

に出てくるコードは自然と身につくから。」

ケイは知ってる曲を選んでいる。

リヨウが思っていたことを聞いた。

リヨウ

「ギター教えてって、いきなりどうしたの？高校の時やってなかったっけ？」

ケイが答える。

ケイ

「やってたけどすぐ辞めちゃってさ、でも、またやりたくなくて、リヨウちゃんがやってるって言うてたからメールしてみたんだよね。」

「

リヨウ

「そっかあ。ギターはおもしろえよ！」

リヨウはギターにはまっていた。

ケイ

「この曲にしよ。」

ケイが決めた曲はリヨウも知っていた。たいていの教本はみんなが知っている曲が書いてある。

リヨウ

「じゃあ弾いてみ。」

ケイ

「えーっと、Cからで…どうゆう風に弾けばいいの？」

リヨウ

「えっとねえ、この曲のストローク（弾き方）はここに書いてあるんだけど、弾く方向が上から、上から、下から、上、上、下…みたいなカンジ。弾いてみるよ。」

実際に弾くリヨウ。ジャンジャカジャンジャカ

ケイ

「なるほど、上、上、下ね。」

ジャンジャカジャンジャカピヤン

Fのコードになると音が鳴らなくなった。
リヨウ

「出た〜！F！バレーコード！ギター弾くときの最初の難関！このコードで辞めちゃう人ただけいることか。」

バレーコードとはすべての弦を人差し指で押さえなくてはならないコードの種類のこと、Fのコードはバレーコードの代表的なものだった。（ちなみにCなどのコードはオープンコードという）

ケイ

「マジで！っか指、超痛いんだけど。」

リヨウ

「最初はね。慣れたら平気だよ。続けることだね。」

ガラガラ

戸が開く音がした。

「ただいま。」ケイのお姉さんが帰って来た。

リヨウ

「おじやましています。」軽く挨拶をするリヨウ。

ケイの姉

「こんばんわ。ケイの友達？」

リヨウ

「はい。そうつす。」

ケイの姉

「ギター教えてんの？」

リヨウ

「そうつすね。」

ケイ

「うるさいよ。あっち行ってて。」

ケイの姉

「いいじゃん別に。」

リヨウ

「とりあえずやんべ。」

ふと時計を見ると18時を過ぎていた。集中してやっていた為、人は気付かなかった。

リヨウ

「俺、そろそろ帰んわ。」

ケイも時計を見る。

ケイ

「もうこんな時間か。わかった、送るよ。」

リヨウ

「おじやましました。」ケイの姉に挨拶するリヨウ。

ケイの姉

「またね。」

車に乗って駅に向かう。

ケイ

「また教えてもらっても平気？」

リヨウ

「ああ。平気だよ。バイトとか予定とかがない日は。」

ケイ

「わかった。ありがとね。」

リヨウ

「すぐやりたいのなら、明日も休みだから平気だけど……どうする？」

ケイ

「じゃあ、明日をお願いします。」

リヨウ

「了解です。」

車が駅に着く。

リヨウ

「また明日、連絡すんわ！ありがとね。」

ケイ

「よろしく！じゃあね！」

2人は別れた。

この日から、2人のストーリーが始まっていく。

2 始動！&It・僕の夏>

リヨウがケイにメールを送る。

「13時25分頃着きます」

返事が返ってくる。

「あいよ」

その位の時間に着くように電車に乗り、待ち合わせ場所に行く。

ブーン

しばらくして車が到着。紺色の軽自動車マニュアル車だ。

ケイ

「ごめん。待った？」

リヨウ

「今、来た。」

変わらぬやりとりで車はケイの家に向かった。

家に着き、居間に行く。今日はケイの姉が最初からいた。

リヨウ

「おじやまします。」

ケイの姉

「こんにちは。」

挨拶したところで、ギターの実習にはいる。

リヨウ

「Fの音でるようになっただ？」

ケイ

「ん〜、微妙だけどでるようになったかな？」
リヨウ

「じゃあ曲弾いてみて。」
ケイが弾いてみる。

ジャンジャカジャンジャカジャンジャカ…
リヨウ

「弾けてんよ。」
ジャンジャカピヤン…

今まで弾けていたFのところまで音が鳴らなくなった。
ケイ

「最初はいいけど、だんだん指が痛くなってきた、最後の方になつてくると鳴らなくなっちゃうんだけど。」

リヨウ
「やっぱり慣れないとね。練習あるのみ！」
ケイ

「そうだね〜。」
リヨウ

「まあ1ヶ月位続けてたら普通に弾けるようにはなるよ。」
リヨウが励ます。

ケイ
「いきなりなんだけど、俺、詞書いてみたんだけどさ、これに曲付けてみてくんない？」

リヨウ

「えっ！？ホントに！？作曲したことないんだけど。」
突然の頼みに驚くリヨウ。

ケイ
「俺、リヨウちゃんと組んで路上ライブとかやりたいんだけど、ダメかなあ？」

「またしても突然言うケイ。」
リヨウ

「突然すぎるよ。ちょっと考えさせて。」
練習を終わりにして今日は解散することにした。
電車に乗りながら、ケイに託された詞をリヨウは見てみた。

タイトル＞僕の夏＜

(今、春だし…)リヨウは思った。

作詞 ケイ

夏がもうやって来た 暑い夏 セミが鳴いている その声は何故か
悲しく聞こえるのは 誰かに伝えたいんだろうか 夏に吹く風が君
のことを思い出させるんだ 今何してる？ 君に会いたい 違う場
所にいるけれど 声を聞かせて

(初めてだけど、やってみるかあ!)リヨウは思った。
家に着き、早速曲作りにかかる。

(どうすればいんだろう…)やったことがない曲作りに戸惑うリヨウ。

(とりあえずテキストにメロディ考えて、それをコードに変えてみよう)

鼻歌をやってみる。曲はあっさり出来た。

「出来たあ！完璧！」初めて作った曲にリヨウは興奮した。自画自賛した。いい曲だと思った。CDにしたらミリオン突破すると思っただくらいだった。その曲を見ないでも弾ける位に練習した。嬉しすぎてケイに出来たと電話で報告しようとした。でもやめた。

メールにした。たかが1曲作っただけでテンション上がって電話したと思われなくなかった。メールならバレない。
リヨウはメールを打った。

「曲、出来たよ。」

曲作りなんて朝メシ前ですよばりに普通の文を打った。
送信。

ブー

ケイのケータイがふるえた。

(メールか?)

リヨウからだった。

ケイ

「もう!? はやっ!」口にだして驚くケイ。

ケイもメールを打つ。

「早いね! 今度練習いつできる? その時間かせてよ。」

リヨウからそのメールの答えが返ってきた。

「明日はバイトだから、その次の日なら大丈夫!」

(明後日か、俺もFを完璧にしないと)ケイはそう思い、練習に取り掛かった。

ジャンジャカジャンジャカジャンジャカ

「ウルサーイ!!」

ケイの姉が怒鳴る。

ケイの姉

「今、何時だと思ってるの!? 夜は弾くなよ!」

時刻、夜の22時。

さすがに近所迷惑の時間だ。

ケイはギターをしまった。

リヨウの家でもそうだった。

「うるさいよっ！いいかげんにしなー！」

1階にいるリヨウの母親が、2階の部屋にいるリヨウに叫んだ。

リヨウ

「おー！」と答える。（おかんの声の方がうるせーよ）同時にそう思った。

練習の日になった。

いつものようにケイの家で行う。

リヨウ

「早速聞く？僕の夏。」

練習が始まりすぐに言った。

ケイ

「うん。聞かせてよ。」

ジャンジャカツカツジャカジャンジャカツカツジャカ

「夏がもう……。」「

唄い終わるリヨウ。

ケイ

「おー！すげー！いいじゃんー！」

ケイもその曲に賛同した。

リヨウ

「ちよつと高めになつちやっただけだね。」

家の時とは違い、こんな曲まだまだよ的な言い方でリヨウが言った。

リヨウ

「一昨日言った事なんだけどさ……やってみよっか路上ライブ。」

ケイ

「マジでー！」

ケイが驚く。自分から言ったのに驚く。

リヨウ

「とりあえずケイちゃんは弾けるようになんないかね。頼むよ！」

ケイ

「はい。」頼りなく言ったケイ。

ケイ

「路上ライブするときって何が必要かなあ？」

リヨウ

「楽譜立てとかじゃね？あと、曲とか沢山弾けた方がいいべ。オリジナル曲もそうだけど、コピー曲とかもね。」

ケイ

「そうかあ。大変だな。」

リヨウ

「それより名前決めねえ？コンビ名。」

ケイ

「いいねえ。実は考えてたんだ。」

リヨウ

「実は俺も。」

考えていることは一緒だった。

あの有名なフォークデュオに対抗して考えた、みかん、2人の名前を足しただけの、ケイリヨウなど、どれもパツとしなかった。

ケイ

「なんかグツとくるものがないね。」

リヨウ

「そう？このゲンガツキーズなんて良くない？」

ケイ

「だせえ。」

2人は行き詰まってしまった。

リヨウ

「今、名前考えてるんすけど、なんかないスか？」

その場にいたケイの姉に突然リヨウが聞いた。

ケイの姉

「ん、レッドパープルとか。」

リヨウが回りを見た後、

「俺っちのTシャツの色じゃないスかっ！」とつつこんだ。

リヨウ

「でもなんかカッコ良くねえ!?どっかのロックバンドみたいでさあ!」すぐに気に入った。ケイ

「そうだね!なんかいい!」何となくいいという理由で、レッドパープルが誕生した。

ケイ

「名前も決まったから次は曲だね。どうしよっか?」

リヨウ

「オリジナル曲を頑張って作る!でもとりあえずはコピー曲とかを覚えるしかないね。」そう言って、持ってきた袋から、有名なコンピの曲が載っている本を出した。

リヨウ

「俺、こんなの持つてるからみんなが知ってる曲選ぶべ。」

ケイ

「そうだね。選ばう!」

リヨウ

「練習も実際に外でやってみない?中と外じゃ違うと思うよ。この辺に民家とかがない場所とかある?」

ケイ

「あるよ。山に囲まれてる公園みたいなものがあるけど家とかほとんどないね。」

リヨウ

「ホントに!行ってみんべーよ!」

2人はギターを持って、車でその公園に向かった。

3 始動!!&It・君がいて>

「いきいき広場」と書かれた看板があった。
リヨウ

「超広くね?」

ケイ

「遊園地にあるような機関車とか走ってるよ、小さいけどね。」
この広場は地元の人ほとんど知っていて、休みの時は家族連れで賑わうらしい。

リヨウ

「いや、いきいき広場ナメてたわあ!もっとちゃっちいかと思っ
た。」

ケイ

「ちゃっちい言うなっ!練習しよ!」
練習場所を歩きながら探す。

リヨウ

「ここが良くねえ?」

草が生えた広場にたどり着いた。石のベンチがあり、変なでかいオ
ブジェがあった。

リヨウ

「邪魔になんないし、座れるし、綺麗だし、なんかこの場所、UF
O呼べそう...」

ケイ

「そうだね。ここにしようか!UFOはカンケーないけどね。」最
後の一言はボソツと言った。

選んだ曲を弾く。リヨウはその曲は見ないでも弾けるので、ケイに
本を渡した。

弾いてみる2人。

やはり問題はケイだった。合わせようにも、段々音がズレていつて

しまつ。

リヨウ

「唄いながら弾くのは難しいかもしれないけど、合わないと思っとなつちやうからさ。」

ケイ

「わかった。もっと練習すんわ。どんな感じでやってる？」

ケイが練習の仕方をリヨウに聞いた。

リヨウ

「とにかく曲を弾きまくったね、俺は。それしかないよ。楽しいから苦じゃないし。」

ケイ

「そつだよ。頑張ろ。」

リヨウ

「ある程度、弾ける曲が増えてからだね、路上にでるのは。コピー曲だけじゃなくて、オリジナル曲も作んなきゃな。」

まだまだ路上に出るには、時間がかかりそつだった。

練習を終わりにして、家に帰って来たケイは引き続き練習を続けた。

（指も最近痛くなくなってきたなあ、慣れてきたな）と思うケイ。

ジャンジャカピヤン…

（Fも弾ける様になつたけど、まだ完璧じゃねーな）しかし、最初の頃よりは上手くなつていた。

（俺も曲作ってみようかなあ…）無謀にもケイは思った。

（まず、詞を書かないとな）

ケイは曲作りに取り掛かつた。

テケテケターテケテケター…。

リヨウのメール着信音がなつた。

リヨウ

「せまる〜」

口ずさみながらケータイを開く。
ケイからだった。

「曲、作ったぜ!!」

その内容を見て驚いた。

リヨウ

「ホントかよっ!」

返信する。

「ホントかよっ!」

口にだした言葉と一緒にだった。
ケイからメールが返ってくる。

「練習の日に聞かせるよ!」

(すげえな) リヨウは思った。

リヨウ

「聞かせてよ、新曲。」

UFOが呼べる(そう思っているのはリヨウだけだが…) 広場に着
き、早速リヨウが聞いた。

ケイ

「練習終わりでいい?」

リヨウ

「勿体振らせないで聞かせてよ。」

ケイ

「楽しみは後にとつといてよ。」

リヨウ

「…まあいいけどさ。」リヨウは早く聞きたかった。
ジャンジャカジャンジャカ…

リヨウ

「もうF、完璧だね。」

ケイ

「マジで！やったぜ！」

練習のおかげで、ケイは詰まらず弾ける様になってきた。

リヨウ

「後は、曲を増やすことだね。じゃ聞かせて、新曲。」

ケイ

「なんだよ、それだけかよ。わかったよ。弾くよ。」

リヨウがケイの方に体を向ける。

ケイ

「なんか緊張する。」

リヨウ

「なんてタイトルなの？」

ケイ

「タイトルは>君がいて<っていうので、バラード系かなあ？」

リヨウ

「おお！バラードかあ。じゃあどつぞ弾いてください。」

タイトル>君がいて<

作詞 ケイ

自分の考えが持てないでいる
どうしたらいいんだ

あなたの為に何かしたくて僕は：

あなたが笑顔になるとうれしくて

ああ うまく言えないけどあなたの事が好きなんだ

気持ちが伝えられないでいる

そんな僕がいる

だけど諦めれない 失いたくない

あなたが笑顔になるとうれしくて

ああ うまく言えないけどあなたの事が好きなんだ

ほんの少しの時間でいいそばにいてほしいんだよ

この歌を聞いてくれないか

今 唄えているのはあなたがいてくれるおかげだよ

ありがとう 好きだよ

4 始動!!!&It;はじまり>

リヨウ

「いいねえ〜。」

ケイ

「マジで!?!ありがとう。」

リヨウ

「じゃあどのパート唄うか決めんべーか。」

新曲のパート決めを行う。

ケイ

「だんだんと曲が増えてきたね。」

リヨウ

「そうだね。もう少しだね。」

コピー曲、オリジナル曲も少ないながらも、確実に増えつつあった。

ケイ

「路上の場所とかどうしようか?」

リヨウ

「そこが問題だよ〜。どうすんべ〜。」

ケイ

「俺のイメージではさあ、なんか路上ライブとか誰もしてない場所
で、そこから集めるっていうのがあるんだよね〜。」

リヨウ

「ここら辺でどこかなあ?」

ケイ

「〇駅とかどう?」

ケイが具体的に場所を言う。

〇町は、ケイの町から電車4つ行ったところにある町だ。

リヨウ

「〇かあ…。」

考えているリヨウにすかさずケイが言った。
ケイ

「そこでやってみよう！」

突然だ。またしても突然なケイ。

リヨウ

「1回、下見に行きたいんだけど。俺、降りた事ないからどんなかわかんねえしさ。」

ケイ

「俺もわかんねえや。そうだね、行ってみよう！」

次の練習の時に、2人は0町に行ってみることにした。

「17時40分のに乗るから、そっちに55分位に着くよ。」

リヨウがケイにメールを送った。

今日は0町に下見に行く日だ。

(いい場所があればいいなあ)リヨウの妄想が膨らむ。

(人がたくさん来たらどうすんべー)そんな考えをしていると、ケイが住む町の駅に着いた。

ケイは乗ったのだろうか。そう思っているとメールがきた。

ケイからだ。

「何号車にいる？」

「11号車にいるよ！」

リヨウはそう返信した。

しばらくするとケイがやって来た。

ケイ

「O 駅、次だっけ？」

リヨウ

「もうちょっとしたらだね。」

ケイ

「いいトコがあればいいね。」

リヨウ

「そうだね。」

そんな話をしているうちに目的地に着いた。

リヨウ

「意外と人降りるね。もつと少ないかと思った。」

ケイ

「俺も初めて降りたからさあ、…こんななんだあ。」

リヨウ

「外でてみんべ！」

改札を出る2人。

駅前だが、そんなに栄えている感じではなかった。

リヨウ

「コンビニとかないんだね。」

ケイ

「そうだね。売店があるからじゃね？」

リヨウ

「とりあえずよさ気な場所探してみんべーか。」

周辺を歩いてみる。

駅前にあるのは、タクシー乗り場やバス乗り場、パン屋やちょっとした

食事処がある。

少し歩くと、学校などがあり、有名な海水浴場もある。

リヨウ

「やっぱ、やるなら駅前がベストだね。」

ケイ

「駅前のほうが人通りが多いもんね。」

リヨウ

「どこら辺でやる？」

ケイ

「そうだねあっちの方は。」向かい側の道のちょっと広がっている門の前を指差した。

その場所に移動する。

駅の近くだが、向かいの道ということもあって人通りは少なくなっ
た。

リヨウ

「いいね。ここでやってみよっか！」

リヨウは賛成した。」

ケイ

「そうしよう！」

言い出したケイもこの場が気に入った。

人に聞いてほしくてやるのに、人通りが少ないトコを選んだ。
完全に矛盾している。

まだ人前で唄うことが恥ずかしいのだ。

リヨウ

「じゃあやってみよっか！今度！」

ケイ

「帰ろっか！」

いよいよ路上にデビューする。まだ曲数は少ないし技術も低いが、
やってみることにした。

> はじまり <

作詞 リヨウ

今日はツイてなかっただけさ

明日からはいいことがあるはず

今日はたまたま運がなかっただけさ
だからもう眠ろう

きっと神様が与えた贈り物なんだ
そう思えばやなこと嬉しくなる

明日からが君の始めの一步

新しい君のはじまり はじまり
そして

明日からは僕も始めの一步

新しい僕のはじまり はじまり

5 デビュール&1st・感謝する&get;

路上ライブの日が迫る。

その前に練習をやることにした。

リヨウ

「なに唄うか決めとく?」

ケイ

「その方がいいかもね。」

弾ける曲は今のところ7曲しかないコピーが5曲で、オリジナルが2曲だった。当然全部弾く。

ケイ

「これで何分くらいかかるかなあ?」

リヨウ

「ん〜、1曲5分としたら35分位?休憩とかいれたら、4〜50分位じゃね?」

ケイ

「約1時間かあ、どうなんだろうね。」

リヨウ

「まあ、やってみなきゃわかんないしね。」

ケイ

「そうだね。」

初めての路上ライブなので2人はよくわからなかった。

「18時32分の電車だと思うから、それ乗って。」

リヨウがケイにメールを打つ。

「あいよ。」

ケイから返事がくる。

ついに路上の日だ。

電車の中のリヨウは緊張していた。

ケイの町に着く。

ケイが乗ったのが見えた。ケイに向かって手を振る。

リヨウ

「ういッス。」

ケイ

「いや〜、いよいよだね。」

リヨウ

「俺、けっこーキンチョーしてんだけど。早くやりたいけど、なんか…。」

ケイ

「そう。俺、けっこー平気かも。」

ケイはいつもと変わらない様子だった。

〇町に着くまでの時間が異様に長く感じた。

リヨウ

「着いた〜!」

〇町に到着する。時刻はちょうど19時だ。

ケイ

「あっち行こうか。」

下見の時に決めた場所に移動する。

ケイ

「どうやるっか?」

リヨウ

「座ってやるしかないね。」

楽譜立ては用意していなかったなので、曲が書いてあるノートをその場に広げた。

リヨウ

「あー、超キンチョーしてるわ〜！」

ケイ

「やべえ、俺もキンチョーしてきた！」

さつきとは違い、ケイも緊張していた。

ギターを取り出す。

リヨウのギターはナチュラルで、ケイのギターはタバコといわれる色のサンバースト（この場合は中がオレンジっぽくて、外にいくにつれて黒くなっていく色の仕上がりのこと）だった。

リヨウ

「やりますかあ！」

テンション上がり気味で言った。

ケイ

「よっしゃ！やるかあ！」

ケイもやる気満々だ。

カツカツカツ

リヨウがピック（ギターを鳴らす為のもの）をボディに当て、リズムをとる。

最初の曲はオリジナル曲だ。

リヨウ

「夏が〜」

オリジナル曲が終わった。当然の如く観客はいない。でも2人はとても嬉しそうだった。

ケイ

「次、やろうか！」

リヨウ

「なんか唄ったら、楽になったんだけど！」

2人の緊張はなくなっていた。

練習で決めた曲順通りにやる。路上ライブをやる人が珍しいのか、

向こう側から見ている人や、歩きながら見ている人が多かったが、止まって聞いてくれる人はいなかった。時間だけが過ぎていき、20時を回った。

これが現実だ。今のレベルじゃ人は来ない。

その内容とは関係なく、2人は充実していた。

リヨウ

「ついにデビューしちゃったね！」

ケイ

「キンチョーしたけど、なんか楽しかった！」

リヨウ

「人は来なかったけどホント楽しかったよね！」

観客は来なかった、でも2人はついに路上デビューをはたした。

20時を過ぎると、人通りが少なくなった。電車から降りてくる人も少ない。

ケイ

「そろそろ撤収しますか？」

リヨウ

「そうだね。帰んべつか！」

今日は終わりにすることにした。

駅のホームへ向かう。

リヨウ

「今日どうだった？」

早速聞いた。

ケイ

「内容はあんま良くなかったけど、初めてやったってゆうところが良かったね。」

リヨウ

「準備不足ってゆーのもあると思ったんだけど、楽譜立てとかさあ、いろいろ必要だったね。」

初めてだったので、何が必要なかはわからなかった。今日やって

気付いたことをリヨウは言った。

ケイ

「他の人達と違ってさあ、どうやってんだらうね？」

リヨウ

「見に行ってみる？」

ケイ

「どこでやってんのか知ってる？」

リヨウ

「ケイちゃんの町でやってる人いたよ。」

ケイ

「マジで？じゃあ見に行ってみようか。」

リヨウ

「そうだね。」

デビューしたものの、2人には経験と情報が足りなかった。なので、他の人達がどんな感じでやっているのか、研究の為に見に行ってみることにした。

>感謝する<

作詞 ケイ

感謝する 感謝する 感謝する

感謝する 感謝する 感謝する

ここにありがとうと言う

人にあるがとうと言う

僕にしかわからないけど

僕だけが知らなくちゃいけない

だから聞いていて

感謝する 感謝する 感謝する

感謝する 感謝する 感謝する

6 ペンギン

路上ライブをやってから1日が経ち、練習で話し合いをした。

リヨウ

「ライブやってん時、風とか吹くとノートめくれて見えなくなった
りしたからさあ、楽譜立ては必要だよ。」

リヨウが楽譜立ての必要性を説明する。

ケイ

「俺もそう思った。あと、下ばつかしか見れないから、前を向いて
唄いたい。」

ケイも必要だと思っていた。

ケイ

「家の近くに楽器屋あるから今度買っておくよ。」

リヨウ

「ああ。よろしく！あとは、曲増やすくらい？」

ケイ

「とりあえずはそうだね。それに、今日路上ライブ見れたらまたな
んか見つかるかもしれないしね。」

路上の時に言っていた、他の人達のやり方を今日見に行こうとして
いた。

リヨウ

「今日やってんかなあ？」

見たことがある、といつても今日確実にやってるとは限らなかった。

ケイ

「まあ、いいんでない。」

だんだんと辺りが暗くなっていき、夜になった。大体は夜に路上ラ
イブは行われる。昼間でもやってる人はいるが、夜の方が人通りが
多い…気がする。

そんなことを2人は全く思わず、夜の町に出かけた。
ケイ

「前、どこで見たの？」

ケイが見たことがあるリヨウに尋ねた。

リヨウ

「たしか駅前ら辺でやってたと思うけど…あつ！」

リヨウが指差した方向をケイが見た。

そこには、1人で唄っている男性がいた。

ケイ

「いた！1人でやってるんだ！」

リヨウ

「行ってみんべ！」

2人はやってるところに移動した。

そこには、観客はいなかった。どうやら2人が最初の観客らしい。

男

「どーも!!」

その男は元気な声で挨拶してきた。

リヨウ

「どーも。」

リヨウは圧倒された。

男

「これ、どうぞ！よろしくお願いしますね！」

そう言つて、2枚の紙を2人に渡した。

コウキ（おそらく名前）と書いてあり、ライブをやる時間と日にち、
どんな曲をやっているかなどが書いてあった。

コウキ

「じゃあ聞いてください！」

そう言つて唄い始める。

2人は曲を聞いた。

下手でもなく、抜群に上手いわけでもない。そう思った。

しかし、回りにはさつきまでいなかった観客が3〜4人増えていた。曲が唄い終わり、拍手をする観客たち。

コウキ

「あざっス！あざっス！いや〜仕事終わりで今やってるから、体に応えますわ！でも、みなさんの拍手のおかげで癒されますデス！」
観客の1人が質問する。

観客

「なんの仕事してるんですか？」

コウキ

「見てのとおり、清掃員です！」
見た目じゃわからない。

観客

「いやわかんないですよ！」

ちよつとした笑いがおきた。

リヨウとケイは1曲聞き終わると、その場から離れようとした。

ケイ

「頑張つて下さい。」

コウキ

「ありがとうございます！またよろしくどうぞ！」

ケイ

「どうだった？」

その場を離れ、ケイが聞いた。

リヨウ

「技術はすげー上手いってわけじゃないね。普通だったね。」

ケイ

「うん。そうだね。」

リヨウ

「ただ、話しが上手かったね。曲が終わった後の観客との接し方ってのかな？親しみやすい感じ？」

ケイ

「ああ、そうだね。それ大切かもしれない。」
「続けてこう言う。」

ケイ

「自己紹介みたいなの紙に書いて来た人に配ってたし、看板も立ててあったね。」

リヨウ

「インパクトだ！」

リヨウがなにかに気付いた。

リヨウ

「インパクトが必要なんじゃない？見る人にわかるようにさあ！」

ケイ

「それあるかも。やっぱ、自分らの名前の看板とかあった方が、見る人はわかるしね。」

リヨウ

「俺っちも看板とか作ってみよっか？」

ケイ

「いいね！」

リヨウ

「いいところだけ真似してみんべ！」

他の人達のやり方を見るのは、どうやら役に立った。

練習の日になり、看板を作ることにした。

リヨウ

「レッドパープルって書けばいんじゃない？」

2人はダンボールを板状にして、自分達のグループ名を書いてみた。

ケイ

「できた！」

ケイが書いたのを見る。細い字でレッドパープルと書かれていた。
リヨウ

「字、細くね？これじゃわかんないべ。あと、これなに？」
名前の横に書かれている、ペンギンみたいな絵を指差した。
ケイ

「これ、俺らのマスコットキャラとしてどう？」
リヨウ

「すげーいらないんだけど。」
リヨウが書いた看板を見せた。はっきりと書かれたレッドパープル
という字はとも見やすかった。

ケイ

「ここ、すき間あいてるじゃん。」

ケイがそこに、さっきのペンギンみたいな絵を書き込んだ。
リヨウ

「おい！何やってんのよ！…意外とあってる。」

ここに変なペンギンのキャラが誕生した。

ケイ

「じゃあ今度の路上の時に使ってみよっか！」
この看板で成果ができればいいが…。

7 理由&It;風>

ケイはメールを打った。

「楽譜立て買ったよ！」

リヨウからの返事がくる。

「了解！ありがと！」

（楽譜立ても買ったし、看板も作ったし、今日、人来るかなあ）ケイはそう思っていた。

前、やった時間に0駅に着いた。

リヨウ

「2回目のライブ！人、来るかなあ…。」

ケイ

「前回よりはきやすい環境にしたけど、どうなんだろうねえ。」
あの場所に移動する。

リヨウ

「やっぱりまだ緊張するな〜！」

ケイ

「俺もだわ〜！」

2回目のライブでむりもなかった。

リヨウ

「よっしゃ！やりますか！」

2人は準備した。楽譜立ての前に看板を立てる。

リヨウ

「どう見える？」

ケイが離れて見てみる。

ケイ

「おお！見える、見える！」

リヨウ

「前は座って唄ったけど、立ってやってみようか。ストラップ（ギター）を立て弾くときに体から吊るせるようにできるもの（持ってきてる？）」

ケイ

「持ってるよ！そうやってみよっか。」

リヨウ

「じゃあいくよー！」

いつものようにピックでリズムをとる。

看板を作ったことは正解だった。行き交う人は、前を通るときに歩くスピードを落として看板を見てくれたり、頑張れよと初めて声をかけられたりもした。

しかし人は止まってくれなかった。

リヨウ

「来ねえなあ。」ため息混じりにそう言った。

ケイ

「前よりはいい感じだと思っけどねえ。」
「今回も観客は無し。」

前回のライブの反省会を行う。

リヨウ

「よかった点は看板とか作ったことだよな？見てくれる人いたし、声とかかけられたしね！」

ケイ

「でも、人は止まってくんなかった…。なんでだろ？」
リヨウ

「インパクト足りねーのかなあ。」

ケイ

「まだ2回目だし、これから来るかもしれないんだからさあ、いいんでない？」

リヨウ

「そうだけどさあ…。なんかやれん事あるかなあ、つて。」

ケイ

「ん…。練習あるのみ！…かなあ？」

リヨウ

「しかないね！」

ケイ

「曲を増やすことはこれからも続けて、どうしよっか？」

リヨウ

「あのさあ、唄ってるのを録音してみたりしたらいいと思うんだけど。」

ケイ

「それいいね！聞いてみて音が外れるとことかがわかるもんね！
2人はいれいるな事を考えた。技術を上げる為に、そしてライブに
来てもらう為に。」

今日もライブをするため、〇町に行く。

リヨウ

「今日こそは人を集めるぞ！」

気合いの入った声で言った。

ケイ

「頑張ろうね！」

ケイも気合い十分。

3回目のライブを行う。

が、人は来ない。

ケイ

「ハア。」

ため息のケイ。

リヨウ

「ちよつと休憩しようか。」

その時、

ブーブーブーブー

ケータイが振動している音がする。

リヨウ

「ケイちゃんのじゃない？」

ケイ

「あつ、ホントだ。電話だわ。」

ケイが電話にでる。

ケイ

「もしもし。」

終始、敬語のケイ。

リヨウ

「誰？先輩？」

話し終わったケイに尋ねた。

ケイ

「先輩にナカイさんっていたじゃん？あの人が見に来てくれるってさあ！」

ナカイさんとは高校の1つ上の先輩で、ケイの中学からの先輩だった。

ナカイ

「よお！久しぶり！」

リヨウ・ケイ

「こんばんわッス。」

ナカイ

「路上ライブやってんとはねえ！なんでやってんの？」

2人に尋ねた。

ケイ

「ギターやってるなら人に見せようと思って、まあそんな感じッス。」

「

リヨウ

「俺も同じッスね。あと、自分の力みたいのを知りたくて。」

ナカイ

「そうなんだ、じゃあ唄ってよ。」

2人はオリジナル曲を唄った。

ナカイ

「いいじゃん！うめーよ！」

リヨウ・ケイ

「ありがとうございます！」

2人は初めて人前で唄った。

ナカイ

「でも楽しい事やってんだかさあ、もっと楽しそうにやれよ！そんなんじゃ人来ねえぞ！」

たしかにそうだった。人を集まることに意識がいつてしまい、自分たちが楽しむことを忘れていた。楽しいからやるのだ。

今回も観客は来なかったが、ナカイさんの言葉によって2人の考えは変わった。

>風<

作詞 ケイ

ここに変わらないものがあるよ
ここに変わらないことがあるよ
だけど変わる気持ちがある
変わろうとする思いがある

このままじゃ僕等ダメなんだって気がついた
後戻りはしないよ ちよつと振り返って見てみるだけさ
笑いあつた昔だね 今は忘れてたキモチ
戻れるかな 戻ろうよ 僕等変わるんだから
風がこの場を吹き抜けた

8 ケイの場合&1t;僕の答え>

帰りの電車の中で、ナカイに言われたことを2人は思い返していた。
リヨウ

「ナカイさんに言われてさあ、思ったんだけど、気にしないようにしよっかなあ…。」

ケイ

「どーゆーこと？」

リヨウ

「なんつーのかなあ？人を集めることを意識しないってゆーか…、また練習んとき話すわ！」

ケイ

「えーっ！言つてよ！気になんじゃん！」

リヨウ

「今、言つと中途半端に話し終わりそうだから、ほらっ！もう着くよ。」

ケイ

「わかったよ。じゃあまた練習のときに！」

リヨウ

「おつかれ〜。」

2人は解散した。

(最初は楽しいからやってたんだよね)

ケイはナカイに言われたことを思い返していた。

(集めることに集中しちゃつてそのこと忘れてたわ…)

ケイはギターを始めたときを思い出す。今と違って、まだFのコードもつまく鳴らないときは、練習さえ楽しく、1回目の路上ライブは人が来なかったのに笑えていた。

今は技術も最初に比べると全然違う、曲数も増えた。しかし、ライブに人が来ないという事で、焦っていた。

そしてその事が気持ちを変えた。楽しいからやるのではなく、単に人を集める為という目的になってしまっていた。

人が来てくれる事は大事だ。来てくれることでモチベーションも上がる。そこに目的をおくのも大切だ。

そしてケイは思った。

(やるからには人を集めたい、自分の曲で人を集めたい) そう決心した。

> 僕の答え<

作詞 ケイ

思っていたことが ホントは違うこと
信じなかったことが 実は正解だった
そんなもんでしょう? この世界は
なにもかもがアタリじゃない
ハズレでもない

ただ君の言葉は安心できるよ

だから僕は君を守ることになんの疑問も思わない
君を救うことになんの躊躇もいらないよ

あたって砕けたくない

できることなら楽したい

そんな僕でも出来るよね

9 リヨウの場合&It・何も見えない>

リヨウ

「家で考えたんだけどさあ…。」

練習の日、自分の考えをケイに告げた。

リヨウ

「俺は、楽しいからギターを始めて、楽しそうだから路上も始めて、その理由でやってただけど、人を集めることばっか意識がいつちやっててそのこと忘れてただよね、ナカイさんに言われて気付いたわ、人は集めたいけど、俺っちが楽しそうにしなきゃ観客は来ないと思うし…。」

その気持ちはケイと一緒にだった。

ケイ

「俺もそう思ったんだよね。自分達が楽しくないとね。」

ケイも考えたことを言った。

リヨウ

「だから俺は、あんま気にしないようにしようかなーって思ったんだよね。まず自分が楽しくなきゃね。」

ケイ

「じゃあ人は集まなくてもいいってこと?」

リヨウ

「ん〜、そういうことじゃなくて、ちよっと矛盾してる感じになっちゃうけど、人は集めたいけどそんな必死になんないっつーか、そんなトコ。」

続けて言うリヨウ。

リヨウ

「俺が思うに、究極のことって矛盾してると思うんだわ。」

ケイ

「矛盾かあ、どうゆうーこと?」

リヨウ

「自分達が唄いたい曲ばっかやって、人は来ないかもしれないし、集めるためにコピー曲ばっかやって、今度は自分たちが嫌になっちゃうかもしれないし、犠牲にっていうと変かもしれないけど、人を集めたいならみんなが知ってるような曲をやった方がいいと思う。でも、自分達が楽しくてなおかつ人も来てくれたら、それはそれで最高だよね！」

ケイ

「そうだね。どっちかをとると、どっちかが犠牲にならなきゃね。」

リヨウ

「そうなんだよね。だから俺は楽しくやろうと思ってさ！」

ケイ

「楽しくやりたいもんね！」

それはケイも同じだった。

2人の考えは一緒だった。

>何も見えない<

作詞 リヨウ

いつものよおに起きた朝 今日仕事は休みだ
毎日が毎回過ぎて

つまらなく感じる自分がいた

どこかへ行こおと車に

乗り込み発進させるけど

町をぐるぐるぐるぐる

まわる まわる 目がまわる

僕は何処に行きたくて 何がしたくて出かけたんだろあ？

僕は何処に行きたくて 何がしたくて出かけたんだろあ？

10 夢を見る&It;理想郷>

リヨウ

「ケイちゃんはこれからどうしたいか、考えとかある？」

ケイ

「どうゆうこと？」

リヨウ

「俺は今、働いてて、ケイちゃんは大学3年だべ？卒業して、就職とかしたら練習とか路上の回数が減っちゃうべ？そのお…、ずっとやるってこと考えてる？まだわかんないかもしれないけど…。」

高校を卒業して、ケイは4年制の大学に進学、リヨウは2年制の専門学校に進学し、そこを卒業して働いていた。

リヨウ

「俺はけっこう長めに考えてるんだけどさ、どうなるかわかんないけどね。」

ケイ

「俺は考えてなかったかも…。」

リヨウ

「1回、ここではつきりしようか。俺はぶっちゃけプロになるためにやってないんだけど、ケイちゃんはどお？」

ケイ

「俺もそれは考えてないよ。」

リヨウ

「ってことは、趣味の延長みたいな感じでやってるって事だよな？言い方悪いけど。」

ケイ

「そっとなっちゃうよね。」

リヨウ

「で、楽しいし、人を集めたいからやるって感じだよな？」

ケイ

「そうだね。でも、プロとか目指さないって言っても、やるからには本気でやるよ。」

リヨウ

「そうだね。」

ケイ

「やるからには人も集めたい。人前に出て唄うんだから、そこで満足で終わりじゃなくて1人でもいいから自分達の歌で共感してほしいんだよね。」

リヨウ

「おお。その考え…素敵だね。」

リヨウが言った言葉にケイは照れた。

ケイ

「えーっ！素敵って…、やめてよ照れるじゃん。」

リヨウ

「まあ、そんな感じでこれからやってくべー！人を集めるためにはやっぱり曲だよ！ほんとにいい曲じゃないと人は立ち止まってくんないって最近、気付いたわ。」

ケイ

「そうだよね。まあ俺は前から気付いてたけど。」

ケイがニヤつきながら言った。

リヨウ

「うぜっ！」

ケイ

「でも自分達の曲で来てほしいよね。理想では、俺ら2人が唄ってるまわりをすげー人が囲んでるみたいなの。」

リヨウ

「それがケイちゃんが目指すトコ？」

ケイ

「ん、っーか路上ライブでの俺の夢かな…。」ちよっとカッコつ

けながら言った。

ケイ

「リヨウちゃんは？」

リヨウ

「何が？」

ケイ

「夢は？」

リヨウ

「俺の夢は…、サッカーせん…」

しゅ、とリヨウが言う前にケイがつっこんだ。

ケイ

「聞いてない。そんなリアルな夢聞いてない。しかも、絶対目指してないし。」

リヨウ

「ごめんね、まじめに言うよ、俺もケイちゃんと同じだよ。人、すげー集めたいね。」

ケイ

「俺と同じ？」

リヨウ

「そう。俺もやるんならそんぐらいにやりたいからね!!」

>理想郷<

作詞 ケイ

思っていることがある

それは君にとって ちっぽけなことであり

それは僕にとって 大切なことである

このことを君に話しはしないよ
きつと笑うから 信じてはくれないだろう
止まってほしい この時間が
止まっていたい この場所に
僕が思うのは こんなささいなことだから
きつと君は笑うだろう

11 新たな…

ケイ

「よっしゃ！できた！」

話し合いの結果から、いい曲をやるという結論に達し、ケイは曲作りにげんでいた。

（今日、リヨウちゃんに聞かせよ…）
今日は練習日だ。

ケイは駅に向かった。

そこにはすでにリヨウが待っていた。

プツプツ

クラクションを鳴らすケイ。

その音に気付き、リヨウがよってくる。

ケイ

「ごめん、待った？」

リヨウ

「んー、今きたとこ。」

いつものやり取りで練習場所に向かった。

その場所に着くと、もうすでに家族連れの人達がそこにいた。

ケイ

「できないっばいね。」

リヨウ

「そうだね。行ったら迷惑かけんね。どうすんべえか？」

しかしそこしか練習場所はない。

ケイ

「…たしか山の方に練習できるようなところあるかもしんない！」
ケイにはおもいあたる場所があるようだ。

リヨウ

「ほんと！？じゃあそこ行くべー！」

いきいき広場も山の方にあるが、ケイが思うところは、それよりもさらに山の奥らしい。

リヨウ

「へえ、キャンプ場なんてあるんだね。」

移動中の車からリヨウが言った。

そこはキャンプ場があったりするところだ。

ケイ

「川とかもあるよ！小さい頃よく行ったなあ。」

そこは川とかがあったりするところだ。

車は対向車ぎりぎりかわせるぐらいに細い道を進む。

リヨウ

「これトラックとかきたらどっちか戻んなきゃだめじゃね？」

ケイ

「あんま車とか走ってないけど、たまにきたら、そうしなきゃ無理だね。」

どんだん道を進む。

空を覆いつくすくらいの木々の枝のすき間から太陽の光が差し込み、道を照らしている。昼間だというのにここは暗い感じだ。しかし、その光のおかげでところどころにはつきりとした明暗がでていいる。そんな道を、ケイが運転するオンボロの車は進んでいった。

リヨウ

「着いたあ！ここかあ！」

そこは「太陽の丘」と書かれた看板が立てられていた。

ケイ

「ここいいでしょ？ちゃんとベンチもあって、山だからうるさくないと思うし。」

リヨウ

「すげー景色いい！キモチいい！マイナスイオンでてんな。興奮ぎみのリヨウ。」

ケイ

「あっちが無理な時さあ、今度からこっちでやるっか？」

リヨウ

「でもここ民家ない？平気？」

そう言つて、リヨウが看板を見つけた。

リヨウ

「ん？ハルサワ？この地区、葉留沢っていうの？」

ケイ

「そうなんじゃない？俺もよく知らないけど、まあ、平気でしょ！そんな近くに建ってるわけじゃないし。」

リヨウ

「…そうだね！言われたらやめればいいしね。」

ケイ

「練習しよっか？」

リヨウ

「オーライ！」

ギターをとりだす2人。

その場所で初めて唄ってみる。

ケイ

「なんかさあ、いつもの場所と違う感じがしたんだけど。」

リヨウ

「やっぱ？なんか、響いてないっつーか、さえぎるものがないから、声がおるっつーか…。」

ケイ

「そうそう！そんな感じ！やる場所が違っただけで聞こえ方も変わるんだね。」

リヨウ

「でも悪くはないよね、この場所。むしろ最高だね！」
ケイ

「ただここ…暑いね。」

山の上なので日差しが強いのもあるが、気付けば季節は夏に移り変わるうとしていた。

12 変化&1t:いずれどこかで...>t:

リヨウ

「とりあえず練習しようか！」

ケイ

「じゃあまず新曲聞いて、できたから。」

リヨウ

「ホントに！？聞かせてよ！」

>いずれどこかで...<

作詞 ケイ

君とは もうなんにもないけど

記憶からは消えないと思う

僕はそうだし 君もそうだし

でも そのことでまた何かあったりするわけじゃない

だから僕はこう思うんだ

はなればなれになるけれど

いつかどこかで会える気がする

そのいつかは わからないけど

君は消えたりしないから

いずれ

どこかで

君のことは もう思わないようにする

それはもう 思ってしまったている

だけでも君は さっぱりと今までのことを

振り返りはしない
だけど今でも僕は思うんだ
はなればなれになるけれど
いつかどこかで会える気がする
そのいつかは わからないけど
君は消えたりしないから
いずれ
どこかで
いずれどこかで

ケイ

「どうだった？」

唄い終わったケイは満足した感じで言った。

リヨウ

「いいね！ってか、ケイちゃんが作る曲って、恋愛系が多いよね。」

ケイ

「マジで！そうだった？」

リヨウ

「なんか詞の内容がそっち系のが多くない？」

オリジナル曲が書かれたノートを見ながら言った。

たしかに、ケイの詞は恋愛を思わせるような内容が多かった。

ケイ

「そうなのかなぁ。気をつけよ。」

リヨウ

「でも、スゲーね。俺、うまく書けないんだけど…。」

ケイ

「俺は、詞の中に主人公がいて、物語みたいな感じで作ることが多いねえ。」

リヨウ

「へー。そうなんだ。」

ケイ

「でも、恋愛系ばっかになってたのかあ。」「
思わぬところを指摘されたケイだった。」

リヨウ

「でも、だんだん曲数も増えてきたね！」

ケイ

「じゃあそろそろ…路上やりますかあ！」

リヨウ

「俺、思ったんだけどさあ…。」

電車の中でリヨウが言った。

今日は路上ライブの日だ。

リヨウ

「今やってる場所、変えねえ？」

ケイ

「えっ？〇町でやんないの？」

リヨウ

「んー、そうじゃなくて、今、駅の向こう側の道沿いでやってんべ？それをもっと人通りの多い方に変えよっかなあってさ！人に聞いてほしくてやってんのに、自らの少ない方でやってたって、なんかウケるね。」

ケイ

「ハハハッ！それもそうだね。じゃあ向こう着いたら決めよっか！」「
2人はようやくそのことに気がついた。

電車が〇町に到着する。

ケイ

「場所どこがいいかなあ？」

リヨウ

「ん〜、ここは!？」

リヨウが言った場所は、駅のすぐ近くの、KIOSKの横だった。

ケイ

「いいね!なんか路上ライブの定番の場所っぽいよね。」

早速ギターを置いて、準備を始める。

すると、警官がやってきた。

警官

「君達、許可とった？」

若い顔立ちの警官は言った。

リヨウ

「…いや〜、とってないツスけど。」

警官

「じゃあダメなんだよねえ。ここJRさんの敷地だからさあ、やるなら許可とらなきゃ。」

リヨウ

「そうなんスカ。わかりました。」

2人はその場を離れた。

今、だんだんと路上ライブが禁止になっていく地域が増えていつて
るらしい。理由は、騒音問題や終わった後のゴミの置き去りなど、
路上ライブをする側の人間のマナーが原因だが、みんながみんなそ
うではなく、純粋に音楽をやりたい人も中にはたくさんいる。しか
し、現実にはやる場所は限られてきている。

2人はその事実を実感した。

ケイ

「あそこはっ!？」

ケイがシャッターの閉まった喫茶店を指差した。

その場所もいかにもという感じな場所だった。

その場所に移動する。

ケイ

「店の人にやっていいか聞いてみる？」

リヨウ

「そうだね。」

裏口にまわる。

そこにはピンポンがあった。

迷わずリヨウが押す。

が、反応なし。

リヨウ

「音鳴った？壊れてんじゃない？」

ケイ

「ドア開いてんのかな？」

ドアを開こうとするが、鍵がかかっていた。

仕方なく店の前に戻る2人。

ケイ

「…隣の店の人に聞いてみる？」

隣はケーキ屋だった。

リヨウ

「そうしょつか！」

ケーキ屋に入る。店内は甘い香りが漂っている。

(食いてえ…)リヨウは思った。

ケイ

「すみません、ちょっと隣で路上ライブやりたいんですけど、平気

ですか。」

ケイが店長らしき人に言った。

店長らしき人

「…ちよつと待っていてください。」

レジカウンターの横の窓から何やら話している。

店長らしき人

「大丈夫だよ。」

「ありがとうございます！」

2人は同時に言った。

すぐに準備にとりかかる。

しかしまたしてもあの警官がやってきた。

警官

「許可とった？」

リヨウ

「ちゃんと言って、とったんで。」

ちよっと不機嫌そうに言った。

警官

「そうか！わかった、頑張れよ！」

応援してくれた若手の警官を（コイツいい奴）とリヨウはこらっと印象を変えた。

これでこの場所のできる。

楽譜立てを出してノートをひろげた。

ケイ

「緊張すんなあ。」

リヨウ

「なんかいつもと違うなあ。」

ケイ

「どうした？」

リヨウ

「ん、別に。ただいつもと違う感じがさあ。」

ケイ

「場所変えたからね。」

リヨウ

「そうだよな。じゃ、やりますかあ！」

2人にとって記念すべき路上ライブが始まった。

13 前進&It・芯>t;

ジャンジャカジャンジャカ…
その日のライブはオリジナル曲から始まった。
ケイが作った新曲からだ。

唄い終わるが、人は来ない。しかし、前の場所よりはあきらかに人が多く通る。

リヨウ

「やつぱこつちの方が多いいね！」

そのことを感じたリヨウがケイに言った。

ケイ

「こつちでやるのは正解だね！」

ケイもそれはわかっていようだ。

あらかじめ決めていた曲順では、次はコピー曲だ。

2人はイントロを弾き始めた。

すると3人組の女子高生が立ち止まった。部活の練習帰りなのか、大きなスポーツバッグを持っていた。

ナカイさんを除けば、初めての観客だ。

リヨウは緊張して前を向いて唄えず、ノートばかり見てしまっていた。

唄いだしのケイは音程がズレた。

それでもその3人組はその場においてくれていた。

曲を唄い終える。

パチパチパチパチ…

拍手の音がする。

「ありがとうございます！」

2人はぺこりとお辞儀する。

沈黙が流れた。

女子高生

「じゃあ頑張ってください!」

3人組は行ってしまった。

リヨウ

「…初じゃねえ!?!」

ケイ

「来たね!人が!」

ついに念願の観客が。しかも3人も。

コピー曲だったけど、1曲聞いたただけだけど、来てくれたことに、かわりはない。

聞きに来たのだ。

リヨウ

「どんどんいくべえ!」

ケイ

「オツケー!」

次の曲にうつった。

今日のライブの曲数は12曲で、約1時間くらいかかる。

2人は唄い続けるが、まだあの3人組の女子高生しかきていない。そして、今日最後の曲を唄い終えた。

リヨウ

「3人だったけどさあ、来てくれたね!」

ケイ

「やったね!」

片付けをしていると、向こう側の道から、女の人が近寄って来た。3〜40代くらいのおばちゃんだ。

おばちゃん

「もう帰っちゃうの?」

ケイ

「あつ、はい。」

おばちゃん

「今、子供迎えにきて待ってたんだけど、ここでこんなことやるなんて珍しいからねえ。聞いてただけど…」

リヨウ

「ありがとうございます！」

おばちゃん

「頑張りなさいねえ！」

そう言つて、財布から1000円札を出して渡した。

おばちゃん

「これでジュースでも買いなさい。」

リヨウ

「いや、いいッスよ！」

おばちゃん

「いいから！」

おばちゃんは車に戻っていった。

リヨウ

「1000円もらったんだけど…」

ケイ

「どうする？使う？」

路上ライブをやって初めてもらったお金だ。

リヨウ

「…とつとこつか？使わないで。その金使っちゃったら、なんの為にやるのかわかんなくなってきたちゃうしね！」

2人は金の為でも、プロになる為でもない、ただ聞いてもらいたくてやっているのだ。

ケイ

「そうだね！」

リヨウ

「ケイちゃん持ってて。俺、使いそうだから。」

ケイ

「…オイ。」

リヨウ

「いや〜、今日、良かったね!」

駅のホームで電車を待っているリヨウが、興奮気味に言った。

ケイ

「マジ良かった〜! 人来て。」

合計で4人来た。

リヨウ

「これからあそこでやるっか?」

ケイ

「そだね。」

場所を変えて、曲数を増やして、いろいろなことを試し、それが今日につながった。

しかし、いいことばかりではない。

リヨウ

「いざ人が来るとさらに緊張すんね! 最初に来た高校生の時とか、すげえ沈黙があったし。」

ケイ

「曲が終わって、間があくからね。観客がいたときに、どう留まらせるかだね。」

リヨウ

「今日はコピー曲で来てくれたから、オリジナル曲でも来てほしいね。」

あげればキリがないほど課題はあった。

しかしまずは最初で最大の目標の人に聞いてもらうことは達成した。

家に着き、リヨウは思った。

(これからライブのことノートに記録して…)

もっと来てもらう為に、飛躍する為に、レッドパープルは今日のライブでやっと1歩前進した。

> 芯 <

作詞 リヨウ

この世は今でも戦いが在り
近代兵器ですべて撃ち抜く
後ろ指さして仲間はずれ
はるか昔の時代から
そんな出来事繰り返す

今と昔で変わったことは
物は進歩し続けてる
今日出た物が明日には
日の目を浴びなくなっている
今と昔でわかったことは
人は後退しているの？
光りのように進む時代
オイテキボリは私だけ？
そんな世界に流されまいと
自分を持つてるヒトがいる
銃で弾たまを撃つのなら
バットに変えて打ちましょう
他人を笑うものならば
自分も笑われてしましましょう

それができるあのヒトは
まことに芯の強いヒト
芯が強いヒトになりたい
そんなヒトになれたらいいな

14 2度目

あのライブから一夜明け、練習を行う。

話題は昨日のライブのことだ。

ケイ

「ついに来たのかあ。」

昨日のことを思い出しながら言っているようだった。

リヨウがすぐに引き戻す。

リヨウ

「でも、止まって聞いてくれたのは1曲だけだったね。しかも、コ

ピー曲。」

ケイ

「そうだけどさあ。」

リヨウ

「なんで来てくれたんだろ？」

ケイ

「それは…。」

リヨウ

「…。」

黙る2人。

ケイ

「…。」

リヨウ

「…。」

まだ続く沈黙。

ケイが口を開く。

ケイ

「俺らがうまいと思ったからじゃね？」

リヨウ

「…そうなんのかね。」

納得していないリヨウ。

ケイ

「まあそう思うところよ。」

リヨウ

「…だね！」

あきらめた。

話しは人がきたときの対策にうつる。

ケイ

「緊張しちゃうんだよね。」

リヨウ

「ん…。その場にいやすくすれば、長くいてくれると思うんだよね。」

ケイ

「曲と曲の合間の時間のときに、いかに留められるかだね。いるときに、ちよつとでも話しておいて、雰囲気がいい感じにしておくのが大切だと思うわ。」

リヨウ

「でもその話題とゆーか、話すことが、いざって時にでないんだよね。」

ケイ

「そうだね…。どうしよつか？」

リヨウ

「なんか決めとかない？まず来てくれたときに絶対これだけは言っとく言葉とか。」

ケイ

「何て言うのよ？」

リヨウ

「えーっとねえ…、どうもー！レッドパープルですー！みたいな。」

ケイ

「芸人みたいじゃん！」

リヨウ

「…ダメ？」

ケイ

「ダメ！」

リヨウ

「じゃあ、ケイちゃんなんかあんの？」

ケイ

「…どうもー！みたいな。」

リヨウ

「同じじゃねえかつ！」

ケイも具体的にはなかった。

ケイ

「まあ場面、場面つてことで…。」

リヨウ

「この話し合いの意味は一体…。」

そんな感じで解決した。

ケイ

「後は、オリジナル曲だけど…。」

リヨウ

「このことについては、もう頑張るしかないね！何とも言えないね。」

ケイ

「そうだね。自分の問題だからね。」

リヨウ

「ある程度は曲数あるからライブはできるけど、常に増やしていかないとパターンが決まっちゃうからね。」

ケイ

「また人来てくれんといいいね。」

ケイ

「また人来てくれんといいいね。」

リヨウ
「もちろん！」

あの喫茶店に到着する。

2人は今日、路上ライブを行おうとしていた。

ケイ

「今日も頑張る！」

リヨウ

「人来てもらうためにね！」

ケイ

「今日も開いてないから、隣の人に言おっか。」

喫茶店はシャッターが閉まっていた。

リヨウ

「そうだね。」

隣のケーキ屋に行く。

ガチャ

ケイ

「すみません。今日もやらせてもらってもいいですか？」

前回と同じく、店長らしき人に言った。

とゆっか、もう店長だと2人は思った。

店長

「ああ、ちよつと待ってて。」

そう言って店の奥に入っていった。

すぐに出てきた、眼鏡をかけた人と一緒に。

どうやら喫茶店の店長のようだ。

喫茶店店長

「兄貴に聞いたんだけどね、君達どっからきてるの？」

どうやら兄弟らしい。

2人が質問に答えると、喫茶店店長は驚いた感じで言った。

喫茶店店長

「そんなところから来てんのかあ。いや、お客さんとかに聞かれたら答えられないのもアレだからさあ、聞いたんだけどね、そうなんだ。まあ頑張つてな。」
これで正式に許可もとれた。

この場所でのライブは2回目だ。しかし、準備をしているときに、「頑張れよ」と声をかけられた。

2人が有名なのか、よっぽど珍しいのか（多分こっちだと思うが…）はわからないが、前よりはいい方に向かっている。

2人は手応えを感じていた。

今日も人は来てくれると。

ライブスタート。

2、3曲唄った辺りで、人が来た。

前回来てくれた3人の女子高生の内の2人だった。

沈黙にならないようにと、すぐにリヨウは声をかけた。

リヨウ

「こんばんわツス！前も来てくれたツスよね？」

女子高生

「はい！そうですね。」

気まずい雰囲気は今日はなかった。

実に自然な感じで時が流れてゆく。

リヨウ

「じゃあオリジナルを…。」

カツカツカツカツ

曲が始まる。

と、それに合わせて手拍子する女子高生達。

まさにこれだよ、と2人は思ったに違いない。

曲が終わる。

パチパチパチパチ

拍手の音。

ギター……。

これしかねえよ、と2人は思ったに違いない。

しかし、女子高生達はオリジナルを1曲聞いただけで行ってしまった。

女子高生達

「頑張つて下さい！」

黄色い声援は行ってしまった。

リヨウ・ケイ

「ありがとうございます！」

心の中では行かないで〜と叫んでいた。

その後は、誰も来ないで終わった。

ケイ

「また最初の方だけだったけどさあ、人来てくれたね！」

片付けをしながらケイが言った。

リヨウ

「そうだね。」

ケイ

「…リヨウちゃん、どうかしたの？」

テンションの低いリヨウにケイがたずねた。

いつものリヨウなら、人が来たことに喜んでいるはずなのに、今日はそんな風に見えなかった。

リヨウ

「何よ、いきなり。なんでもないって。帰んべ！ハハハツ。」

笑ってみせるリヨウ。

自分の勘違いか、とケイは思ったが、まだなにかひっかかる感じがした。

ケイ

「次、いつやるつかあ？」

今の所、人も来てくれていて2人の活動はノッている。

ケイ

「いつ休み？」

リヨウ

「たしか土曜、休みだよ。」

ケイ

「じゃあ土曜日やるつか？」

リヨウ

「そうだね。」

ケイ

「また来てくれんといいいね。」

リヨウ

「そうだね。」

ケイ

「ってかりヨウちゃん、そうだねしか言っただねえって。」

リヨウ

「…そうだね。」

ケイ

「ほらまた！どうかしたの？」

リヨウ

「なんか…、んー…、何て言ったらいいのかなあ？そのさ…人が来るのは良いことだけどさあ、俺っちの曲は聞いてくれてるのかなあ？」

ケイ

「？」

たしかによくわからなかった。

ケイ

「どゆこと？」

リヨウ

「人が来てくれてもさあ、曲を聞いてくれなきゃあんまし意味ないと思うんだわ。」

ケイ

「うーん…。」

リヨウ

「…意味ないってことはないけど、あんまうまく言えないんだけどさあ、なんつーのかなあ？たとえば…100人来ても、俺たちの曲を聞いてないよりは、1人でもいいから俺たちの曲を聞いてくれる方がいいんだよね、俺は。」

ケイ

「そっかあ…。」

リヨウ

「たとえばね。ぶつちやけ100人来たらスゲエうれしいし、人が聞いているか聞いてないかなんてわかんないけどさあ。」

ケイ

「そっだよね。でも、その考えはいいと思うよ。俺もそっちの考えに賛成だよ。」

リヨウ

「とりあえず頑張ることにかわりはないけどね。」

ケイ

「そっだね。」

リヨウ

「じゃあ今日は葉留沢の方に行こうか！」

ケイ

「いきいき広場今日、空いてるよっ。」

リヨウ

「なんか今日はあつちでやりたい感じなの…。」
ケイ

「じゃあ行きますか!」
車は山奥に入っただけだった。
葉留沢に到着。

リヨウ

「ハァー! キモチー! やっぱマイナスイオン出てるわ!」
ケイ

「毎回言うよね、それ…。」

2人はギターを取り出して、丸太を半分に割ったテーブルに座った。
ジャンジャカツカツジャカ…

オリジナルを唄う2人。

「今日も来たのかい?」

後ろから声があったので、いったん弾くのをやめ、振り向いた。

そこにはおばちゃんが立っていた。

たぶんここの住人だろう。

リヨウ

「こんちはツス。あの…うるさかったツスか?」

リヨウは気になって聞こえることを聞いた。

生音とはいえ、おもいつきし弾いているし、外とはいえ、おもいつきし大声で唄っていた。

おばちゃん

「だいじょぶよ〜! 逆にBGMとして聞いているわよ〜! 畑仕事してると聞こえてきてねえ。」

このおばちゃんからBGMという言葉が出るとは思いもしなかった。
そんなことより、迷惑ではないことがわかり2人は安心した。

ケイ

「ありがとうございます! また練習に来るかもしれないですけど、
よろしく願います。」

おばちゃん

「いつでも来なよ〜！わたし、スギヤマって言うんだけど2人のことみんなに宣伝しとくから、発表する場とかあったら教えるわね！」
のちに、このスギヤマさんが2人の活動の場を広げてくれる存在になるとは、この時はまだ知らなかった。

>あるがままの思い<

作詞 リヨウ

ああ 僕は僕のままでもいいんだね
とやかに言われる筋合いはないんだ
ああ僕は このままでもいいんだね
とにかくそれは今わかったんだ

何分何秒の世界の中で

僕は一体 人生を

どのくらい無駄にしているのだろうか
モチロンやりたいこともある
叶えたい夢だつて持つてる

だけど 僕の周りの人達が
いろいろと僕に言うんだ

それはいいことだつてあるが

僕を罵にはめようとするときもある

僕は自分がうまく見れないから

すぐに他人に頼ってしまうんだ だけどね

ああ 僕は僕のままでもいいんだね

とやかに言われる筋合いはないんだ

ああ 僕はこのままでもいいんだね

とにかくそれは今わかったんだ

16 チャンス！&It・底辺>

最近の練習場所が葉留沢に変わってきていた。

いきいき広場に人がいてやれない、という理由もあるが、その場所が気に入ってきたというのもあった。

この前のライブでは人が来てくれた。これで今のところ3連続で来てくれている。

人数は1人だったが、オリジナル曲を聞いてくれた。

リヨウ

「オリジナル曲で来てくれたの初めてだよね？」

ケイ

「たぶんそうだと思うよ。嬉しいよね！」

リヨウ

「なんか、わかってくれたと思うと嬉しいね！」

ケイ

「人をたくさん集めるのもいいけど、リヨウちゃんが言ってた自分達の歌をわかってもらいたってゆづのがわかった気がするよ。」

リヨウ

「1人だったけどさあ、これから2、3と増やしていけたら素敵だよね。」

ケイ

「素敵だよね。」

素敵だよね…いい響きだ。

リヨウ

「おっ、到着。」

葉留沢に着く。

リヨウ

「ん〜。やっぱりマイナス…」

ケイ

「またその言葉かいつ！」

体を伸ばしながらリヨウ が言おうとしたアノ言葉に、ケイが遮るようにツッコミを入れた。

リヨウ

「ふう。じゃあやるっか？」

いつもの場所に座り、いつものようにギターを弾く。いつものように時間が進む。

練習が前よりもっと楽しくなってきた。

演奏技術の上達により、路上ライブの観客数が増えたように感じる。実際はそうなのかわからないが、なにより楽しい！

自然と顔がニヤけてしまう。

他人が見ればちよつと気持ち悪いくらいだった。

スギヤマさん

「お疲れさん！」

スギヤマさん登場。

リヨウ・ケイ

「こんにちはーッス！」

スギヤマさん

「今日は暑いねえ。」

確かに暑かった。

ケイ

「そツスね。」

スギヤマさん

「ところで今週の日曜日って2人とも予定とかあるの？」

リヨウ

「いや〜、まだわかんないッスけど。どうしたんスか？」

スギヤマさん

「実はその日、葉留沢で夏祭りみたいなのがあってね、それで2人に何曲か唄ってもらおうと思ってねえ。」

ケイ

「まじッスか!?!」

スギヤマさん

「大丈夫?」

ケイ

「: ちょっとまだわかんないんで、わかったらすぐに言いますよ!」
スギヤマ

「そう! じゃあちょっと待ってて。」

そう言つて、家の方に向かっていった。

ケイ

「俺は平気だけど、リョウちゃん平気?」

リョウ

「家帰つてみなきやわかんないけど、日曜だから多分だいじょぶ。」
スギヤマさんが戻ってきた。

スギヤマさん

「じゃあこれ、連絡先ね。」

電話番号が書かれた紙をケイに渡した。

ケイ

「ありがとうございます。わかったら連絡します。」

チャンスがきた。

たくさんの人の前でやれる。

ケイ

「わかったらメールしてよ。」

リョウ

「了解。休みだったらいいなあ。」

ケイ

「なに唄おつか? やっぱオリジナル?」

リヨウ

「そうだね。唄いたいね。」

ケイ

「何曲やっていいのかな？」

リヨウ

「そんなにやれないべ。」

ケイ

「だよ。じゃあ2、3曲だとしたら…、1曲コピーで、あとオリジナルにする？」

リヨウ

「いいよ！」

ケイ

「じゃあそれでいこう！」

リヨウ

「とりあえず連絡すんわ！」

2人は解散した。

家に着き、リヨウは早速ケイにメールした。

「休みだったよ！できるッス！」

ケイはその内容を見て、スギヤマさんに電話した。

しばらくするとケイからメールが返ってきた。

「いまさっきスギヤマさんに電話したら、11時頃に葉留沢にきてだつてさ！」

リヨウが返信する。

「了解！じゃあその前くらいに練習しとこっか？」

ケイからすぐに返ってきた。

「あいよ！」

レッドパープルを結成して初めての大会、そのことを思うとなかなか眠れないでいた。

>底辺<

作詞 ケイ

絶望の影を見た
暗く黒いおぞましい影を
悲劇の音を聞いた
耳をふさいでも聞こえてしまう

死神と出会った
目的は俺だったのか？
不幸の手紙が届いた
まさかこれは奴からなのか…
もうやるしかない
いまここは底辺だ
もう休みはない
駆け上がれ 駆け登れ

最低最悪この状態
小さなことがバカらしく見えた

ここで決心 やるべきことは
ひたすら上へ はい上がれ

17 葉留沢夏祭りライブ

日曜日。

葉留沢での夏祭りの日になった。

リヨウはケイにメールした。

「今から行くよ!」

必要な荷物を持ってリヨウは家を出た。

昨日のうちから準備をした、忘れ物はないはずだ。

電車の中で荷物をチェックする。

(忘れ物はねえな)

窓の外の景色を見ると空は快晴で、自分を応援しているかのようにリヨウは思った。

待ち合わせ場所にはケイの車がすでに止まっていた。

リヨウ

「ういッス! 待った?」

ケイ

「んーん、今来た。」

リヨウ

「お願いしまーす。」

車に乗り込むリヨウ。

ケイ

「とりあえず俺ん家行こっか?」

リヨウ

「いいよ。」

ケイ

「なんか、ワクワクしちゃってさあ、昨日から準備とかしちゃった

よ。」

リヨウ

「ホント〜!?俺もなんだけど!」

やることはみな一緒だ。

リヨウ

「遠足みたいだべな?」

ケイ

「遠足かあゝ、じゃあ今日のおやつは500円までね!」

リヨウ

「知らねえよ…。」

ケイの家に到着する。

ケイ

「上がって。」

リヨウ

「おじゃまします。」

スギヤマさんに言われた時間より、まだだいぶあった。

ケイ

「オリジナルは最近できたやつで、コピーは、みんなが知ってる曲にする?」

リヨウ

「それでいこう!」

話し合いをしていると、ケイの姉がやってきた。

ケイの姉

「おはよー。」

寝起きだ。

リヨウ

「おはよーございませす。おじゃましてませす。」

ケイの姉

「早いね。練習?」

その問いにケイが答えた。

ケイ

「今日、夏祭りがあったって唄ってくれって頼まれたの。」

ケイの姉

「どこでやるのよ?」

ケイ

「葉留沢ってところ。」

ケイの姉

「へえー、あの山のほうでやるんだ。」

(ケイちゃんのお姉さんは葉留沢、知ってるんだ…) リヨウは思った。

ケイの姉

「ステージとかでやるの?」

そこんところはまったくわからない。

ケイ

「いや、わかんね。」

ケイの姉

「うちの友達もねえ、音楽やっててライブとかするんだよ。」
リヨウ

「そうなんスカ。いいッスね。」

ケイ

「ってか、そろそろ行かなきゃやばくね?」
リヨウ

「えっ? もうそんな時間?」

ケイの姉

「じゃ、頑張つてきなねえ。」

2人はベタな感じで出かけていった。

ケイ

「いつもやってるとこ行けばいいのかなあ?」

リヨウ

「あつ！スギヤマさん、いるわ！」

車から下りる2人。

スギヤマさん

「ありがとねえ！こつちでやってるからさあ！」

スギヤマさんは上のほうを指さした。

そこは、広場みたいになっていて「葉留沢公民館」と書いてある看板が付けられた家があり、まあ集会所的のところだった。結構人がいる。

ここに住んでる人や、知り合いの人らしい。

スギヤマさん

「あつちにおにぎりとかあるから食べてて、時間になったら声かけるからさあ！」

そう言つて、家の中に入つていった。

ステージはなかった。おそらくその場でやるのだろう。

リヨウ

「ちよつとキマズイね…。」

コソコソと移動する。

しかし、ギターを持っていたのですぐにばれる。

住人

「お兄ちゃんたちが今日、演奏してくれるの!？」

ケイ

「そ、そうですね。」

住人

「ありがとねー！こつち来てご飯食べてよ！」

住人たち

「おいで！おいで！」

リヨウ・ケイ

「ありがとございますー！」

食べ物はこの人たちが作ったもので、おにぎり、煮物、おしんこ、

豚汁など、たくさん種類が大量にあった。
どれもうまかった。

が、ぶつちやけ緊張して味わってらんなかった。

スギヤマさん

「じゃあそろそろ、いいかしら？」

ついに声がかかった。

心臓がドキドキしているのがわかった。

いまさつきまで、みんなと食事をしていたところより離れたところに、さすが2つ並べられた。

荷物を持ってそこに移動する2人。

楽譜立てとノートをだしてセットする。

続いてギターのチューニング。みんなの視線がこっちに向けられるのがわかる。

スギヤマさんが近寄ってきた。

スギヤマさん

「準備はもうできたかしら？」

リヨウ・ケイ

「ハイ！」

もうやるしかない。

スギヤマさん

「えーと、名前は？」

そういえば言っただけだったっけ？

ケイ

「ケイです。」

リヨウ

「リヨウです。」

スギヤマさん

「ケイ君とリヨウ君ね！わかりました。じゃあ始めちゃっよっ。」

リヨウ・ケイ

「だいじょぶです！」

スギヤマさん

「みなさん！ではこれからギターの生演奏をしますので、お聞き下さい！」

パチパチパチパチ…

見たところ、20人くらいはいた。

こんな大勢の前でやるのは初めてのことで、2人の頭の中は真っ白になっていた。

ケイ

「フーツ…、リヨウちゃん、一回深呼吸しよう。」

ケイが小声で言った。ケイは落ち着きを取り戻していた。

その提案にリヨウも体がほぐれる。

リヨウ

「オーライ。フーツ…スー…フーツ…。」

コンビはこうゆう状況のときはいいのかもしれない、決して1人ではないのだから。

(よしっ！)

リヨウ

「今日は自分ら2人をこの場に招待していただき、本当にありがとうございます！ありがとうございます！自分ら2人はレッドパープルとゆうグループで路上ライブとかやってます！自分はリヨウと言います！」

ケイ

「おいしいご飯もごちそうしてもらって、本当にありがとうございます！自分ケイといます！歌のほうはまだまだかもしれないですけど、よろしくお願いします！ではまず最初はオリジナル曲を唄います！」

打ち合わせなどしていなかった。しかし、言葉がどんどんとでてきた。

落ち着いた結果だ。

オリジナル コピー オリジナルという順番でライブは行われた。

たった3曲だけだったが、そこにいた人たちは喜んでくれた。

スギヤマさん

「いや〜ありがと！ありがと！こんなことやったの今回が初めてだったからね、昨日のうちから張り切っちゃったわよ！」

スギヤマさんもそうだったのか。

リヨウ

「こちらこそ今日はありがとうございました！」

ケイ

「ありがとうございました！」

2人は深々とお辞儀をした。

スギヤマさん

「またこうゆうのがあったら言うから、よろしくね！」

夏祭りはまだ続いていたが2人は先に帰ることにした。

ケイ

「これからうち行って反省会する？」

リヨウ

「そうだね。今日どうだった？」

ケイ

「よかったよ。よかったけど…、やっぱり緊張しすぎてたから音程とか外したことがあったし、まあ…詳しくはうちで話そうよ。」

リヨウ

「そうだよな。もう反省会始めちゃってんしね。」

ケイの家に向かった。

ケイ

「ただいまー！」

リヨウ

「おじやましませーす！」

いつも話し合っている場所にはケイのお姉さんが座っていた。

ケイの姉

「おかえり。どうだったの？」

ケイ

「別に。よかったよ。」

ケイの姉

「もっと具体的に言ってよ。リヨウちゃん、どうだったの？」

リヨウ

「20人くらいの前でやったんすけど、緊張しちゃって失敗したところもあつたんすけど、よかったツスよ。」

ケイの姉

「ふーん。よかったじゃん。」

ケイ

「今から練習するから、向こう行ってて。」

ケイの姉

「えー！いいじゃん、いても。」

ケイ

「じゃあ、あっちの方に座ってよ。」

ケイの姉

「冷たいねえ、名付けの親だよ？あたし。」

ケイ

「親じゃねーじゃん、俺の姉じゃん。」

ケイの姉

「そうゆう意味じゃなくて…。」

リヨウ

「まあ、今日はやってよかったよね。」

（なんてのんきな…）

ケイはそう思った。

葉留沢でのライブは無事に終了し、またいつもの路上ライブに切り替わっていった。

今までにない大勢の前でのライブが今後の路上に繋がるかどうかはわからないが、レッドパープルにとって一つの経験として残ることは、確かなことであった。

作詞 リヨウ

なにかもできるようになってきた世界は
なんでもしていいわけじゃない
見分けがつかなくなっているけど
ホントは白黒ハッキリしている

今日はキレイなオレンジの
夕焼けが空に現れた
このオレンジ色を誰かが
同じ思いで見てるはず

違いはそれぞれあるけれど
元をたどればみな同じ
違いはたくさんあるけれど
流す涙はみな青い
その手を赤く染めないで
その手を赤く染めないで

19 向上の為に

葉留沢でのライブのおかげか、路上ライブで人が聞きに来てもあり緊張しなくなっていた。

葉留沢みたいな大人数ではないが、人前に慣れてきた感じだ。来ない日もあるが、人が来てくれる日の方が多くなった。

ケイ

「これからもっとたくさんの人に来てもらいたいけど、どうすりゃいんだろうね〜。」

リヨウ

「曲作り、コピー曲増やすことはやってることだし、唄とかギターいきなり上手くなるなら苦労しねーし、う〜ん…。」

完全に行き詰まった状態。
マンネリ化だ。

リヨウ

「やりまくるしかないね!」

最終的にはそうゆうことになってしまっ
すると、ケイがなにか思い付いた。

ケイ

「ちよっとさあ、場所変えてみない?」

リヨウ

「違う場所にするの?」

ケイ

「そう!人は来てるけどあえて他の場所です!別に今やってる場所
でずっとやらなきゃいけないってわけじゃないし…:どうかな?」

リヨウ

「おもしろそうだけど、どこでやる?」

ケイ

「ん〜、Y 駅とか?」

Y 駅、あの有名なデュオが路上ライブをやったとかやってないとか…そんな場所。

今やってるところと比べると、人は多いし、街ももつと都会だ。

リヨウ

「Y 駅か。いいね！ すごい！ おもしろそう！ やってみるかあ！」

ケイ

「じゃあ決まりね！ 1 回下見に行ってみる？」

リヨウ

「行ってみよつか！ じゃあ…」

リヨウの仕事が休みの日に 2 人で行ってみることにした。

Y 駅までに行くのにケイの駅の駅から片道で 1000 円以上かかった。

電車で出会う 2 人。

リヨウ

「電車賃けっこうすんね。久しぶりに行くけど、こんなかかったっけって思っちゃったよ。」

ケイ

「あんまし何回も行けないね。金が…」

電車賃もかかるが時間もかかった。2 人は 1 時間くらい電車で揺れながら、心踊らせながら座っていた。

ようやく到着する頃には空は薄暗くなっていた。

ケイ

「到着！ やっぱ人が多いなあ！」

リヨウ

「こっちは都会だね。」

夜になるうとしているのに、人が途切れることはない。これからさらに多くなるうとしている。

そこは都会。眠らない街。

リヨウ

「やれそんな場所探してみる？」

ケイ

「そうだね。」

駅の周りを歩いてみると、路上ライブをしているグループを多数見つけた。

ケイ

「おお！やってる！」

どのグループもスピーカーから音を出していた。

リヨウ

「みんなアンプとか使ってるね。」

ケイ

「生音でやってる人いないのかなあ？」

辺りを見てみたがやってる人はいない。

リヨウ

「ここで今度やる？」

ケイ

「できるかなあ？」

たしかに、駅の近くは人通りが多いが、やる人も多くなる。やれそうなスペースは今は埋まっていた。

とりあえず他の場所を探し歩いてみた。

リヨウ

「ここは？」

さつきと違って人通りは少なかったが、いい感じのスペースはある。

ケイ

「そうだね。無難だね。」

リヨウ

「じゃあ今度ここでやろう！」
とりあえず場所は決まった。あとはその日が来るのを待つのみ。もちろん練習も忘れずに…。

本番当日。

電車内での会話はいつもより少なかった。

リヨウ

「なんか…緊張する。」

ケイ

「うん…。」

やることは同じなのに、やるところが違つたとナニガチガウ感じだつた。

電車の乗客が増えては減り、増えては減り、と地元を離れていくにつれ景色が変わつてゆく。

都会だ。

そしてちょうど19時になる頃、Y駅に到着。

決めた場所に移動する。

途中にアノ場所を通つた。今日も路上ライブを行う方たちが多数いた。人通りも多い。

都会だ。

そこからまた歩きだし、ようやく目的地に着いた。

人通りはやはり比べると少ない。

それでも都会だ。

O駅（いつもより少ない）よりはいる。

Tシャツではちょっと風が冷たいことを感じる。もうすぐ秋ですね。

でもそんなの関係ねえ。

2人は声を揃えて言った。

リヨウ・ケイ

「どうもー！」

20 詞の広場（前書き）

今回の内容は詞のみです。

20 詞の広場

> 日付が変わる頃に<

作詞 リヨウ

今から愚痴をこぼすけど
あんまり気にしないで流しておくれよ

人の心はわからない
何を考えてるのかさっぱり
それをなんでわかりきった風に
偉そうに言うんだい？

違いますよと言いにくい相手だし
黙ってうなずくしかない
ますます口調は激しくなっていき
いつしか説教に…

気づけば日付が変わる頃
気づけば日付が変わる頃

今から愚痴をこぼすけど
あんまり気にしないで流しておくれよ

今日は飲み会楽しくやろう
酒飲み酔い回り目も回る
そんな時に何故怒りだす
アナタの態度が場をしらけさす
周りの仲間が止めに入る
それでも勢いおさまらず

止める仲間に一喝

ホント呆れる…

気づけば日付が変わる頃

気づけば日付が変わる頃

明日になればもう過去のこと

なかったことには出来ないけれど

明日になれば新しい

時間が進みだす

>ひとり<

作詞 ケイ

雨やまぬ夜の街

暗い道ひとりゆく

傘ささず君を待ち

頬をしずくが流れゆく

季節はすでに秋

少し早めのマフラー巻く

外はまだ雨が降り

何故か涙が流れゆく

この街で出会ったふたりは
運命だったのかなあ

君と繋がってたくて
小さな手にぎりしめ
一緒に歩いた長い道
今はひとりでゆくよ

夜は明け雨上がり
空には虹がかかる
隣に君はいない
ひとりつきりといま思う

季節は繰り返し
冬がこの地を包む
やがて雪降りそそぎ
僕の心を雪が冷やす

この街で出会ったふたりは
運命だったのかなあ

君と繋がってたくて
細いからだ抱き寄せて
ふたりで話したこの場所に
今はひとりで居るよ

君と繋がってたくて
小さな手にぎりしめ

一緒に歩いた長い道

今はひとりでゆくよ

今はひとりでゆくよ

20 詞の広場（後書き）

ありがとうございました。次の回は本編に戻ります。

21 サバナナでワサビが…？

Y駅での路上ライブから何週間か過ぎた。

2人はいつもどりのO駅での路上ライブに戻っていた。

Y駅のライブは、声はかけられはしたが止まってくれぬ人はいなかった。

1時間くらい唄って撤収した。

得たものはほとんど無い。失ったものはデカイ…お金だけど。

しかし、そのこともまた経験として2人に残るだろう。

次のライブの打ち合わせをしていると、ケイの姉がやってきた。

リヨウ

「あつ、お邪魔してます。」

ケイの姉

「おお、久しぶり〜！打ち合わせしてるの？」

リヨウ

「そツスね。」

ケイの姉

「前にウチの友達もライブとかやってるって言ったじゃん？今度ライブやるんだけど行ってみる？」

リヨウ

「えっ！ホントツスか！いいんスか！？」

ケイの姉

「大丈夫だよ。誰か誘って来てって言われてて、ちょうどいいからさ！」

リヨウ

「あざーす！ケイちゃん、行くべーよ！」

ケイ

「…行ってみよっか！他の人たちの歌を聞くのも大事だしね。」

ケイの姉

「じゃあ言つとくね。私、遅れていくから。」

ケイ

「えーっ！遅れて来んの？俺ら気まずいじゃん！」

ケイの姉

「平気だよ。ちゃんと言つとくし。」

ケイ

「ホントかよ？まあいいけど。」

場所、日にち、時間を聞いて一度ケイの家に集まってから行くことにした。

ケイ

「ライブハウスでやるらしいよ！楽しみじゃね？」

ちようどいい時間になるまでケイの家で待機していた。

リヨウ

「へえ〜、ロックかなあ？」

ケイ

「詳しくは聞いてないけど、そうなんじゃね？」

リヨウ

「ケイちゃんのねーちゃんはいつ来るの？」

リヨウも気まずいと感じていた。

ケイ

「なんか用事があるから友達とあとから行くってさ。そんな遅くならないって言ってたけど、気まずいよね。」

リヨウ

「…そうだね。」

だんだんと予定時刻が近づいてくる。

リヨウ

「そろそろ出んべーか。」

ケイ

「だね。遅刻しちゃう。」

ライブが行われる場所はケイの地元だった。

そんなに遠くはなかったけど、始まる前に挨拶をしとくということ
で早めに出といた。

ライブハウスは地下になっていた。

ネオン管の看板がピカピカとしている。

英語で書いてある。

リヨウ

「筆記体になってるからわかんねえや。S、A…わかるケイちゃん
？」

ケイ

「読めないけど。サバンナって言うてたからここでしょ。」

階段を下る。地下になっているから。

5、6段くらいしかない階段を下る。

いい感じに廃れた木の扉を引く。

開かない。

リヨウ

「鍵閉まってんの？」

ケイ

「わかんねえ。でも開かない。」

ドアノブの下に書いてある文字をリヨウが見つけた。

PUSH。

SAVANNAは読めなくてもこれは読める。

リヨウ

「…押すんじゃないの？」

ギイ…

開いた。

ケイ

「テへ…。」

リヨウ

「テヘじゃねえ。」

中に入る2人。

うつすらと明かりがついていた。

2、30人くらいで人がいっぱいになりそう客席。

開演時間まではちょっと早かったので人はいないが、これからここに人が来るのだろう。

ここはライブハウス、SAVANNA。

奥にある通路を少し進むと部屋があった。

ワサビ様と書かれている。

バンド名か？。

ケイがドアをノックした。

コンコン。

ガチャ。

ドアが開く。

男

「ん？どうしたんすか？」

ケイ

「あの…ちょっと挨拶に…。」

もう一人のメンバーが来た。

女

「どうしたの？」

ケイ

「いや、挨拶に来たんすけど…。」

女

「…もしかして、ミキの弟さん？」

ケイ

「はい！そうッス！」

女

「なんだー！はやく言ってよー！どっぞ中に。」

2人は部屋に入った。

ワサビのメンバーの自己紹介をもらった。

4人組で、ボーカルのユウカさん、ギターのアツさん、ベースのトモさん、ドラムのヨシさんで構成されているバンド。

ボーカルのユウカさんだけがケイの姉と友達だと思ったが、全員がそうだった。

高校が同じで、2年からやり始め、大学を卒業しても活動は続いている。

ユウカさん

「ミキから聞いているよ！ケイ君とリョウちゃんだよね？ケイ君がミキの弟？」

ケイ

「そうですね。」

アツさん

「2人もさあ、ギターやってんだよね？路上ライブとかも。リョウ・ケイ」

「やっています。」

トモさん

「ういゝ！かつけゝ！」

ユウカさん

「まあ、今日は盛り上がっていいこうね！」

ライブが始まる時間が早くこないかと2人は思って待っていた。

22 打ち上げの中で…

アツさん

「そろそろ時間だからさあ、ちょっと失礼してもらってもいいかな？」

ケイ

「あつ、はい！失礼します。」

リヨウ

「頑張つて下さい！」

控室から出る2人。

向こうの方はザワザワしている。

ステージの方に戻ると観客ですでにうめつくされていた。満員だった。

リヨウ

「すげー！ちょー人いるよ！」

ケイ

「前の方に行こう！」

回りを見回すリヨウ。

リヨウ

「まだケイちゃんのねーちゃん来てないね。」

ケイ

「挨拶も済んだことだし、もう平気だよ。」

前の方に移動するが、人がいっぱいでは行けなかった。

ステージはまだ暗い。

妙な静けさがライブハウス内を包む。

予定時刻になった。

ステージの脇からワサビの4人が登場した。

うおーーー！！

一気に歓声上がる。

それぞれ持ち場について音合わせをする。スピーカーから出る音が中の客を盛り上げた。中低音が身体や地面を震わせた。高音が頭の中に鳴り響いた。すげえ。

2人はそう思っていた。

突然、曲が始まった。

そうすると、客もリズムに合わせて手を動かしている。

2人も真似をする。

ライブハウス内には一体感が生まれていた。

疾走感で溢れていたステージがバラードに変わり、ゆったりした雰囲気になった。

ワサビというバンドは完全に客の心を掴んでいる気がした。盛り上がりながらライブ終了。

2人はおつかれと言うために控室に向かった。

すると、ケイの姉の姿が見えた。

ケイ

「あれっ？いたんだ。」

ケイの姉は友達と一緒にだった。

ケイの姉

「うん。ちょっと遅れたけどね。挨拶しにいった？」

ケイ

「おお。行った。すげえ気まずかったけど、ちゃんと知ってた。」

ケイの姉

「言ってるって言ったじゃーん！打ち上げも参加しなよ。」

ケイ

「打ち上げも！？平気なのかよ？」

ケイの姉

「だいじょぶよ。リヨウちゃんも行くでしょ？」

リヨウ

「あつ、行ってもいいんなら…。ケイちゃん行くべ？」

ケイ

「平気らしいから、行こう。」

ケイの姉

「とりあえず控室行こうよ。」

控室は興奮しているワサビのメンバーがいた。

トモさん

「おお！今日はありがとな！」

ケイ

「最高でした！」

リヨウ

「すげえカツコ良かったッス！」

ケイの姉

「みんなおつかれさま〜！」

ユウカさん

「ありがと〜！打ち上げ来るでしょ？」

ケイの姉

「うん。行くよ〜！」

ユウカさん

「いつものとこだからさ！2人も来るよね？」

ケイ

「あつ、だいじょぶッスか？」

ユウカさん

「ぜんぜん平気！きなよ。」

リヨウ・ケイ

「はい！」

打ち上げの場所は、ライブハウスのすぐ近くにあるチェーンの居酒屋で行われた。

いつもの場所らしい。

4人のワサビのメンバー、ケイの姉、みんなの友達たちが5人に、リヨウとケイの2人で、総勢12人での打ち上げだった。

ワサビのリーダーであるアツさんが乾杯の音頭をとる。
アツさん

「えー、まあ、今日はさあ、ありがと！乾杯！」
一同

「乾杯！」

いろいろ話していると、しばらくするとリョウとケイに話題がふれられた。

ヨシさん

「路上ライブとかやってるんれしょ？」

酔っ払って、口がまわらなくなっているヨシさんが2人に聞いた。
「つか、今日初めてこの人の声を聞いた。」

ユウカさん

「しゃべれてないから。で、そうなんだよね？」

リョウ

「そうツスね。」

トモさん

「ういゝ！かつけゝ！」

さつきとおんなじリアクション。

時間が経つにつれ、バラバラに話すようになってきていた。

ケイはユウカさんの隣に座った。

ケイ

「聞きたいことがあるんスけど、いいツスカ？」

ユウカさん

「ん、なゝに？」

ケイ

「やっぱメンバー内でケンカとかあるんスカ？」

ユウカさん

「んゝ、たまにあるけど、どうしたの？」

ケイ

「いやなんか、本音でぶつかって結束を固めるとかよくあるじゃな

いッスか。なんか、とことん話し合って決めるとか、そうゆーのや
つてんのかなあって思ってた…。」

ユウカさん

「あー、あるね、そうゆーの。2人はあんまりケンカしなそうだね。
仲良さそうだもん。」

そう言っつて、リヨウの方を見た。

リヨウは、トモさんとヨシさんになにやら熱く語られていた。

ユウカさん

「ケンカするのは、良くないかもしれないけど、悪いとは言えない
かも…、つてどっちだよ!。」

ケイ

「うーん。」

ユウカさん

「あの3人、何の話してんだろ?」

席を立ち、3人のところに行つた。

ケイはユウカさんが言ったことを考えていた。

ケイ

「昨日なに話してたの？」

打ち上げの次の日、練習を行った。

リヨウ

「…ん？話って？」

2日酔いな感じでリヨウは答えた。

ケイ

「なんか熱く語られてたじゃん。」

リヨウ

「ああ、それね！カレーの話ね！」

ケイ

「カレーの話してたの？」

リヨウ

「カレーにトマト入れるとうまいツスよ、って言ったらトモさんが料理好きだったらしくて、熱く語られたよ。」

ケイ

「ヨシさんもいたじゃん。」

リヨウ

「あの人は、ぶっちゃけ酔っ払っててなにしゃべってんのかわかんなかった。面白い人だけだね。」

ケイ

「たしかに。」

リヨウ

「あとからユウカさん来て、あの人はマヨネーズかけるとうまいって言ったら、トモさんが邪道だって言ってたよ。」

カレーの話で盛り上がっていると、リヨウのケータイが震えた。

ブーブー

リヨウ

「ユウカさんからだ。」

リヨウとケイはワサビのメンバーと番号を交換していた。
電話にでるリヨウ。

リヨウ

「はい。」

ユウカさん

「もしもし。リヨウちゃん？昨日はありがとね〜！」

リヨウ

「いや〜、こちらこそありがとございました！楽しかったッス！」

ユウカさん

「たのしかったねえ！今一人なの？」

リヨウ

「今、ケイちゃんと一緒にッスよ。」

ユウカさん

「ホント！？じゃあ、ありがとって言うといてよ！」

リヨウ

「わかりました。じゃあ失礼します！」

ユウカさん

「じゃあ、またね〜！バイバイ！」

電話をきる。

リヨウ

「ユウカさんが昨日はありがとだってさ。」

ケイ

「楽しかったねー！昨日は。」

リヨウ

「そうだねー。」

気づけば葉留沢に到着。

リヨウ

「ハアー！キモチー！」

ケイ

「マイナスイオン！！でしょ？」

リヨウ

「…先言うなって。」

練習を開始する2人。

何曲か唄い終わると、ケイがリヨウに聞いた。

ケイ

「今まで作った曲で改善する点とかある？」

リヨウ

「えっ、特にないけど。どしたの？」

ケイ

「いや、遠慮して言えないって思ってさあ。」

リヨウ

「ホント、特に無いよ。遠慮もしてないしさ。」

ケイ

「リヨウちゃん、あんまし言わないからさあ、なんか俺らって話し合いとか深くないし、言い争ったりしてないじゃん？」

リヨウ

「そお？話し合いとかしてるし、言い争ったりしない方がいいんじゃない！」

ケイ

「反発しあったりして意見とか言った方がいい曲とかやり方とかが生まれそうじゃね？ユウカさんから聞いたけど、ワサビの中でも、そうゆーのやって成長してきたところもあるらしいしさあ。」

ケイは強くリヨウにすすめる。

リヨウ

「ん〜。…」

悩むリヨウ。

ケイ

「たぶん遠慮みたいのがまだあるかもしれないよ、俺らの中に。だ

からケンカとかなかったと思うんだよね。ワサビみたいに遠慮せずに話し合ったらいいと思うんだよね。」

リヨウ

「ワサビみたいになくてもいいんじゃない？」

悩んでいたリヨウが口を開いた。

ケイ

「どゆこと？」

リヨウ

「ケイちゃんが言うこともいいとは思いますが、それはワサビのことだし、俺っちは俺っちでいいと思うよ。それに俺は遠慮してもいいし、ホントに言いたいことがあったら言ってるよ。」

ケイ

「∴。」

リヨウ

「俺っちは俺っちでいいよ。」

ケイ

「∴そうだね。なんか他のグループがどんなか気になっちゃって、自分のこと見失ってたよ。俺らは俺らだもんね！」

リヨウ

「まっ、そゆことで。」

自分らしく、レッドパープルらしく、2人はその事を強く思った。

24 同業者からのお誘い&It・迷>

リヨウ

「そろそろやりますかい？」

ケイ

「やりますか！」

2人はいつものように0駅で路上ライブをしていた。

1人の通行人がよってくる。

そして2人の前で止まった。歳はちょっと上だろうか。

リヨウ

「どうもー！レッドパープルです！」

軽く頭を下げるさきほどの通行人。

唄い出す2人。

唄い終わると、聞いていた通行人はしゃべり始めた。

テツロウさん

「僕も実は路上ライブとかやってまして、アルマジロのテツロウって言います。」

同業者だ。(仕事にしているわけではないが…)どう思ったのだろう。

リヨウ

「そーなんスか。いきなりで悪いんスけど、どう思いました？自分の歌…。」

テツロウさん

「いや、よかったよ。この駅前でやってるの見たことないから声かけたんだけど、オリジナルって何曲くらいあるの？」

ケイ

「そつツスねえ…、20曲位ツスかね。」

テツロウさん

「けっこうあるね〜！路上やりだしたの最近でしょ？」
ケイ

「はい。最近ツスけど、練習とか結構してたんですよ。」
テツロウさん

「そっかあ。じゃあ、オリジナル曲がけっこう出来てから、出てきたんだね。」

ケイ
「そんな感じツスね。」
テツロウさん

「実はさ、こっゆーこともやってんだけど見てもらっていいかな？」
2人にチラシを渡した。

真冬のフェス！！
冬にやってもいいでSHOW！

的な内容のチラシ。

リヨウ
「これ…なんスか？」

テツロウさん
「いや〜、冬にライブやろうと思っただけさ！音楽やってる奴らで集まってやるんだけど、毎年、夏にやって冬は今年が初めてでさあ、やろうかなと。」

ケイ
「へえー、こんなことやってるんスか？」

テツロウさん
「そうなんだよねー。もうちょい先だけど、出てみない？」
リヨウ

「そツスね。出てみる？」
ケイにたずねた。

ケイ

「面白そうだよね。出ようか！」

テツロウさん

「おお！出てくれる！？じゃあこの日に出演者で集まって順番とか決めるから来てね。」

チラシとは別に、集まるところの場所と時間が書かれた紙を渡された。

リヨウ

「はい。わかりました。ありがとうございます。」

ケイ

「ありがとうございます。」

テツロウさん

「じゃあよろしくねー。」

そう言っつて、テツロウさんは行ってしまった。

ケイ

「なんかノリで出ますっつて言っちゃったけど、どうなのかなあ？」

リヨウ

「まあ、集まるっつて言っつたからそんな時詳しくわかるべ？」

ケイ

「ユウカさんとか知っつてんかなあ？」

リヨウ

「そうだね。知っつてそうだよね。」

ケイ

「俺、聞いてみるよ。」

リヨウ

「ホント？ヨロシク〜！」

路上ライブが終わり、ケイはユウカさんにメールしてみることにした。

>迷<

作詞 ケイ

もう迷わない 迷いたくない
君を不安にさせたくない
迷わない 迷わない

揺るがないようにと決めた
みんな不安にさせたくない
そのこと胸に誓った
今を見失いたくなかった

選ぶ道がたくさんある
そのぶん迷うことになる
選択肢はもちろんいる
だけど迷わず決める

迷うことは仕方がないさ
それでもスパッと決めるんだ
君が選んだ答えだから
そこに間違いなんてないはずさ

25 冬のイベント

ケイはユウカさんにメールを送信した。
内容はこうだ。

「ちょっと聞きたいことがあるんすけど、アルマジロっていうグループのテツロウさんって人から、ライブ出てみない？って誘われたんですけど、なんか知ってますか？」

すぐに返ってきた。

「ライブって冬のフェスでしょ！ケイ君ちも出るの？ワサビはもちろん出るよ！！」

ワサビも誘われているらしい。

夏のライブはけっこうやっていて、ワサビも何度も出ているらしいが、冬は今年かららしく、アコースティック系のグループを探していると、ユウカさんはテツロウさんが言っているのを聞いたらしい。

ライブの目的は、いわゆるエコ。屋台などもでて売り上げの一部が森林の育成にと寄付される。

その主旨に賛同してくれたグループがステージで歌などを披露する。テツロウさんはその実行委員らしく見た目若いが、けっこう年上らしい。

ケイはリョウウにメールをした。

「とりあえず話し合いがあるから、それ行ってみよう！」

しばらくすると、リョウウからの返信が。

「了解！」

話し合いに行ってみることにした。

渡された紙に書いてある場所に行ってみた。

意外と、ケイの家の近くだった。

公民館らしきところ。

自動ドアのところには、このことを教えてくれたテツロウさんの姿があった。

テツロウさん

「おお！来てくれたんだ！」

ケイ

「ども、来ました！」

テツロウさん

「2階に上がって、すぐ左に会議室があるからそこ行っというて。」

リョウ・ケイ

「はい！」

階段を上がると、すぐ左に会議室があった。

ドアの前には誰かが立っている。

その人に話し掛けてみた。

リョウ

「すみません、ライブの話し合いがあるって聞いたんですけど、この部屋でいいんですか？」

男

「そうですよ。どうぞ中に。」

部屋の中はこのライブに出る人達なのか、何人かはすでに来ていた。その中に、ワサビのアツさんとユウカさんがいた。

ユウカさん

「2人とも！」

手招きするユウカさん。

リヨウ

「おお。もう来てるし。」

ケイ

「あっち行こう。」

2人はユウカさんたちの隣に座った。

アツさん

「久しぶりだよねえ。なんかさあ。」

リヨウ

「そうツスね。飲み会以来ですね。」

ユウカさん

「ライブでるよね？」

ケイ

「出ると思いますよ。」

ユウカさん

「出ると思うって、まだ完ぺき決まりじゃないの？」

ケイ

「この話し合いを聞いてから決めようかなって、ほとんど出るツスけどね。」

ユウカさん

「そーゆーことね。」

テツロウさんとドアの前に立っていた男の人が入ってきた。

テツロウさん

「えーと、まだ全員来てないんですが、時間なんで始めたいと思います。まず私から自己紹介します。このイベントの実行委員のテツロウといっています。このライブでも、アルマジロっていうグループで出るんでどうぞヨロシク。」

次にテツロウさんの隣に座っていた男の人がしゃべりはじめた。

ドアの前にいたひとだ。

シンゴさん

「同じく、実行委員のシンゴです。僕もここにいるテツロウと一緒に出るんでよろしくお願いします。」

2人はコンビを組んでいるらしい。

テツロウさん

「じゃあ僕から見て右側に座ってる人から自己紹介お願いします。名前と、バンド名と、ボーカルならボーカルみたいな感じで言ってください。」

次々に自己紹介がされていく中、一人の男の人が大きな声で言った。
コウキ

「どーも！コウキです！よく〇町で一人で路上ライブやっています！よろしくお願いします！」

一度見に行ったことのある人がいた。

（この人も出るんだ…）

リョウは思った。

アツさん

「ワサビのアツです。担当はギターとコーラスです。よろしく願いします。」

ユウカさん

「同じくワサビのユウカです。ボーカルやっています。お願いします。」

次はいよいよレッドパープルの番になった。

リョウ

「えー、レッドパープルのリョウと言います。自分らも路上ライブなどで活動しています。お願いします。」

ケイ

「レッドパープルのケイです。担当はギター、ボーカル、ハープです。よろしくお願いします。」

テツロウさん

「ありがとうございます。じゃあ初めての人も、何度かやってる人もいるんで、このイベントの主旨を説明したいと思います。」

26 説明会

簡単に教えてもらった内容をもう一度聞く。

テツロウさん

「目的は緑を増やそうみたいな感じなんですけど今、環境破壊とかで自然がなくなってきてるじゃないですか、それでこの考えに賛成してくれる人が出店だったり、ステージで歌とかを披露してくれたりして、その売り上げを森林育成の為の募金に寄付するのを毎年夏にやってたんですけど、今年からは冬にもやるうってゆう案がでまして、こうして集まってもらったわけなんです。で、ステージの持ち時間は1バンド、20分で、その中でセッティング、曲などやってもらいます。」

テツロウさんはみんなにわかりやすく説明してくれた。

シンゴさん

「じゃあ次に、唄う順番を決めるんで…、えーっとどうしよっか？」

テツロウさん

「ジャンルでわけとく？」

シンゴさん

「そうしよっか。」

何やらこそこそと話し込んでいる。

シンゴさん

「…えーと、じゃあアコースティック系と、エレキ系みたいな感じで行けるんで、自分達のグループがどっちなのかこのホワイトボードに書き込んでください。両方な感じのグループは真ん中でお願います。」

テツロウさん

「ちなみにアルマジロは…アコースティック、と。」

テツロウさんはアコースティック系の欄に名前を書き入れた。

アコースティックの欄と、エレキの欄にグループの名前が書き加え

られていく、だいたい半々くらいだった。

ケイ

「エレキ系って、ロックとか激しいってことかなあ？」

リヨウ

「そうじゃね？」

ユウカさん

「私が書いてくるわ。」

ユウカさんが立ち上がる。

順番はワサビの番になっていた。

ワサビ。

カタカナの文字が真ん中に書かれる。

リヨウ

「アコースティック系の曲とかもあるんスか？」

リヨウはアツさんに聞いた。

アツさん

「そうだねえ。あるねえ。」

ユウカさんが戻ってくると同じくらいにケイが立った。

ケイ

「俺行つてくんよ。」

アコースティックの欄にレッドパープルという名前が入る。

シンゴさん

「後は来てないグループはだいたいどんなジャンルかわかるんで…、

ん〜と、半々くらいになりましたね。」

ほんとにちょうどくらいにわかれていた。

シンゴさん

「じゃあ次は唄う順番を決めますんで、10組いるんでアコ系とエレキ系が交互になるような感じにしたいんで。あつ、最後はこのイベントのオリジナルバンドのオリジナルなんですけど、えー、誰か立候補する人いますかね？特にトップバッターを…。」

一番最初が一番やりたくなかった。

回りのグループも黙っている。ただ一人を除いて。

コウキさん

「俺やります!」

手を挙げたのは、ソロで路上ライブをしているあの人だった。

シンゴさん

「おっ! やつてくれる? いつも悪いねえ。」

えっ、いつも? 常連で、毎回トップバッターなのか?

ケイ

「あの人って、常連なんスか?」

ケイはユウカさんにたずねた。

ユウカさん

「コウキ君は夏のライブよく出てるよ。」

アツさん

「毎回のように最初だよなあ。」

ケイ

「そっなのかあ。」

徐々に順番が決まっていく。

ケイ

「どうする? なに唄つかも決まってるし...。」

リヨウ

「うーん、どうしよう。」

テツロウさん

「レッドパープルさんはどうかな?」

突然、声がかかる。

リヨウ

「えっ、あっ、ん...、時間とかってわかりますか? やる時間みないな。」

テツロウさん

「あー! 時間ねっ! えーと、そうですねえ、いろいろ準備とかあるんで、集合は午前中ですけどやるのは15時を予定してますね。」

リヨウ

「そうなんですか。えーと…。」
悩むリヨウ。

テツロウさん

「真ん中辺りが今、空いてるんだけどいいですかねえ？」

リヨウ

「どうする？そこにしとく？」

ケイ

「いいんじゃない？」

リヨウ

「じゃ、お願いします。」

テツロウさん

「わかりました。ありがとうございます。
なんとか順番が決まった。」

1 コウキ

2 M a g i c M u s i c

3 ゼブラ

4 レッドパープル

5 S m o k e

休憩

6 ゆりかご

7 僕、無ー理ーズ

8 A P i e c e O f C a k e

9 アルマジロ

10 ワサビ

11 オリヅル

レッドパープルは4番目、ワサビはオリジナルバンドを除けばトリだった。

すげえ。2人は思った。

テツロウさん

「順番も決まったところで、本番は2週間後の日曜なんですけど、次の週の日曜日にプレイイベントとしてゴミ拾いをやりますんで、基本、全員参加なんでお願いします。」

あらかじめ渡されていた資料を見ても書いてあった。

場所 M町。

M町はリヨウの地元だ。

リヨウ

「M町!?ここでやんの?」

ユウカさん

「どしたの?」

リヨウ

「ここ俺の地元なんすけど、こんなイベントがあったとは…。」

ケイ

「じゃあ本番はリヨウちゃん家集合ね!」

衝撃的な事実を知って、会議は幕を閉じた。

27 ゴミ拾い

ケイ

「こんなイベントがあるなんて知らなかったの？」

リヨウ

「まったく知らなかったよ。」

今日はプレイベントのゴミ拾いの日だ。リヨウの家で集合時間まで時間を潰していた。

ケイ

「つーか、曲どうしよつかあ？」

リヨウ

「そうだよねえ。そろそろ決めとかなないと、ライブに向けて練習もやってかないとまじいね。」

ケイ

「新しい曲で揃えとく？それとも、自信のある曲でいっとく？」

リヨウ

「1曲はエコ的な曲入れるんだっけ？」

このイベントの主旨にそって、ステージで歌など披露するグループは、一つは入れなければいけない決まりになっていた。

ケイ

「エコ的な曲かあ…。あつたっけ？」

リヨウ

「微妙かも…。」

集合時間が迫ってくる。

ケイ

「とりあえず行こうか。」

リヨウ

「そだね。」

海に面しているリヨウの地元。今日のゴミ拾いは、海沿いを歩きな

がらゴミ拾いをする。
リヨウの車に乗り込む。
集合場所へ向かった。

集合場所の駐車場になっているところに着くと、イベントの出演者はすでにけっこう来ていた。

リヨウ

「アレ？遅刻っばい？」

ケイ

「いや、まだ時間過ぎてないよ。」
車からおりる。

リヨウ・ケイ

「こんちはーッス！」

まずシンゴさんが気付いた。

シンゴさん

「おお！ありがとねー！」

そこには、ワサビのメンバーも全員揃っていた。

トモさん

「よお！久しぶりじゃん！」

リヨウ・ケイ

「こんにちはーッス！」

ポランティアの人達も集まり、テツロウさんが今日の説明をする。

テツロウさん

「えー、ではそろそろ始めたいと思います。じゃあ、一人1枚ゴミ袋とゴミばさみを持ってもらって、ここの半島を歩きながら落ちてるゴミを拾ってもらいます。それで、燃えるゴミ、燃えないゴミ、カン、ビンにちゃんとわけて拾ってください。じゃあ今日はよろしくお願いします！」

長い行列が海沿いを歩く。

リヨウ

「俺、燃えるゴミ拾うわ！」

ケイ

「じゃあ俺は燃えないゴミね。」

落ちてるゴミを拾う2人。

タバコの吸い殻、吸い殻、吸い殻、紙クズ、吸い殻…

リヨウ

「燃えるゴミつつーか、吸い殻ばっかじゃねえかつ！」

ケイ

「いや、ヒマだなあ。」

リヨウ

「こつち選ばなきゃよかつた…。」

トモさん

「ホントだよな。」

後ろにはワサビのメンバーが歩いていて、トモさんも燃えるゴミ担

当だった。

リヨウ

「トモさんもツスか？」

トモさん

「そつだよ！俺ばっかでこいつらなんもねーんだよ！」

ユウカさん

「そんなことないでしょ。私の袋入ってるよ。」

見ると、空のペットボトルが何本か入っていた。

ヨシさん

「とりあえず行くべ。」

久しぶりにヨシさんがしゃべった。みんなまた歩き出した。

ゴミは至る所に落ちていた。

吸い殻、お菓子の紙の容器、汚くなった新聞紙にダンボール。すべて燃えるゴミ。

リヨウ

リヨウ

「トモさん燃えるゴミ落ちてますよ。あつ、そこにも。あつちにも。」

「
トモさん

「…オメーも担当だろうが。」

リヨウ

「バレたか。」

歩き続けていると、海岸に出た。地元では有名なM海岸。

リヨウ

「M海岸なつかしいなあ。ん、マイナスイオン出てるな、こりや。」

ケイ

「出てないから。絶対出てないから。」

ヨシさん

「たしかに。感じる。」

ケイ

「いや、出てないツスよ…。」

海岸は燃えるゴミだけではなく、いろんなゴミが落ちていた。中には、なんでこんなものが？、と思うようなものも落ちていた。

海岸でみんなゴミを拾う。岩に挟まったゴミを拾う。砂に埋もれたゴミを拾う。貝ではなくゴミを拾う。

コウキさん

「こんなに出ましたけど。」

コウキさんが、ばかデカイ、変な、何でできてるかわからないような、ってかゴミなの？的な、ばかデカイゴミを拾ってきた。

ケイ

「すごいツスね！」

コウキさん

「いや、大変だったよ！すげえ重てえ。」

ケイ

「ハハハッ！」

コウキさん

「君、前にライブ見に来てくれたことあるよね？君の相方と。」
コウキさんは覚えていた。

ケイ

「はい！今、自分らも路上やってるんすよ。」

コウキさん

「そうなんだ！じゃあ来週のイベントも頑張ろうぜ！」

ケイ

「はい！」

テツロウさん

「本日はイベントのゴミ拾いにご参加いただき、ありがとうございます。えー、来週は毎年、夏にやっているコンサートを冬にもやるので、今日来て下さったボランティアの方々もぜひ見に行らして下さい。出演者の方は渡した紙に内容が書いてあるんで、当日はお願いします。今日はありがとうございました！」
ライブ、来週に迫る。

でもまだ何を唄うのかも決まっていなかった。

28 冬のライブ！&It;ヒカリ>

プレイベントのゴミ拾いから1週間がたった。

そう、今日は冬のフェスである。

レッドパープルは唄う曲をなんとか決めた。

1曲、5分と予想して全部で4曲。1つはエコ的な曲、残り3曲はリヨウ自身、ケイ自身が唄いたい曲と、選んだ全体の曲を考えて、新しく作ったゆっくりめな曲に決めた。

1度リヨウの家に集まって最終確認をする。

リヨウ

「忘れ物ないよね？」

ケイ

「ダイジョブ。何回も確認して来たから。」

リヨウ

「ノートに楽譜立てにあと…、あっ…！」

リヨウがなにかに気付いた。

リヨウ

「ケイちゃんのギターってアンプ通せないよね？」

ケイ

「…そうだった。まずいかなあ？」

リヨウ

「生音だと聞こえづらいから、たぶんスピーカーから音出すと思うんだけど。…あの紙に書いとけばよかったのかなあ？」

あの紙とは、説明会の時に渡された紙で、マイクの使う本数、立ち位置などを書いて提出するものだったが、2人共そんな書くの初めてで、よくわからないという理由で適当に書いて出してしまった。リヨウ

「やべえ。あの紙に詳しく書かなきゃいけなかったのかあ。」

ケイ

「…どうする？」

リヨウ

「とりあえずなんとかなんべ…。」
不安げにリヨウは言った。

2人は荷物を持ち、イベントが行われる場所に向かった。

そこに着くと、もう準備は始まっていた。まだ決めた時間ではないので出演者は少なかった。

2人はテツロウさんを見つけ、挨拶する。

リヨウ・ケイ

「おはようございます。」

テツロウさん

「お！おはよー。早いね。」

ケイ

「はい。で、どうすればいいですか？」

テツロウさん

「じゃあ荷物あっちに置いて、テント立ててもらおうかな。わかんなかったら、シンゴに聞いてみて。」

すでに出来上がっているステージの後ろの建物を指差した。そこに荷物を置いて、シンゴさんを探した。

リヨウ・ケイ

「おはようございます！」

シンゴさん

「おはようございます。」

ケイ

「テント立てるの手伝ってくれてテツロウさんに言われたんすけど、どうすればいいツスカ？」

シンゴさん

「ありがとね。じゃあ、この骨組み、組み立てていてくれる？」
リヨウ・ケイ

「はい！」

運動会などでよく立てられてる白い布地のテントを準備する。

2、3個準備したところで、シンゴさんが2人を呼んだ。

シンゴさん

「みんな来たからあっちに集まるつか。」

今日の出演者が全員集まった。

テツロウさん

「じゃあまず、テントの準備してもらいます。そのなかで順番に呼ぶんで、呼ばれたらステージ上がっているこっちと打ち合わせお願いします。じゃあまずコウキ君からで。」

コウキさん

「はい。」

またテントの準備にとりかかった。

ジャラ〜ンジャラ〜ン

ギターの音がスピーカーから聞こえてくる。

リヨウ

「おお。すげえ。かっけえ。」

何分かするとレッドパールが呼ばれた。

2人はギターを持ってステージに上がる。

シンゴさん

「じゃあ軽く弾いて唄ってみて。」

リヨウ

「あの、ちよつといいッスか？」

シンゴさん

「どうしたの？」

リヨウ

「提出した紙に書かなかつたんすけど、エレアコじゃないんでアンブに繋げないんすけど、どうすればいいッスかね。」

シンゴさん

「んー…、じゃあ直接マイクでひろうから、マイクもう1本必要だ

ね。どっちのギター？」

ケイ

「俺のツス。」

シンゴさん

「じゃ、準備できたら音出して。」

ジャンジャカツカジャカ…

シンゴさん

「オツケー！ありがと。ちょっとケイ君のギターの音が小さくなっちゃうけど、だいじょぶ？」

ケイ

「あ、だいじょぶです。すいません。」

会場の準備もほぼ終わり、あとは時間がくるのを待つのみとなった。テツロウさん

「えー、準備のほう、ありがとございました。もうそろそろ時間なんで人が入ってくると思いますけど、では今日一日盛り上がっていきましよう！！」

冬のフェスが始まった。

>ヒカリ<

作詞 リヨウ

数ある可能性の中から

1本の光が

キミの体を照らす

それが進むべき道に見えた

キミが知っている人達が

遠回りしていると

何故かあせらすように
何に怯えるように

それが原因でキミが迷って
わからなくなっ出て出した答えが
キミにとって本当にいいこと？
キミにとって…

真っ暗な闇の中で
自分の手さえ見えなくなっても
僕がキミを照らしてあげるから
僕がキミを支えてあげるから

会場が段々と賑やかになっていく。

ケイ

「多くねえ!?!」

リヨウ

「多い!やべえ、緊張してきた!」

葉留沢でのライブより人が多かった。

屋台などがでているので割と騒がしい。

突然、BGMが鳴る。

テツロウさん

「どーも!いや〜始まりました!寒空のフェス!真冬にやってもいいでSHOW!」

チラシの文句とじゃっかん変わっている。

テツロウさん

「毎年ね、夏にやってるんだけど、今年は冬にもやるうってね!でえー申し遅れました。このイベントのMCを勤めさせていただくツロウと申します。夏来てくれた人はね、またかよ〜!みたいな感じですけど、よろしくお願いします。」

シンゴさん

「同じくMCのシンゴです!夏来てくれた人はね、またかよ〜!みたいな感じですけど…」

テツロウさん

「言った。今、言った。」

シンゴさん

「えっ、言った?言ったっけ?」

テツロウさん

「言ったから。俺がほんの少し前に言ったから。」
シンゴさん

「そうかあ。まあ、そんな感じで今日はヨロシクオネガイシマス。」
テツロウさん

「なんで最後カタコト？えー無視していきましょう。このイベントは、森林育成の為の募金を会場内に設置してあり、そして屋台の売り上げの一部も寄付されます。会場内にはゴミ箱も設置してありますが、ちゃんと分別されていますので、ご協力お願いします。書かれた紙を、あの、まる読みしました。それを踏まえた上で今日は楽しんでいきましょう！ではそろそろ歌にいきたいと思います！トツプバッターを務めてくれるのは、コウキさんです！どうぞー！」
コウキさんがステージに上がる。

アンプに繋ぎ、軽く調節している。

テツロウさん

「準備は…オツケイですね。ではお願いします。」

コウキさん

「えー、はじめましてコウキです！今日は盛り上がって、騒いでいってください！」

激しいギターの音がアンプを伝い、スピーカーに流れ出る。

リヨウ

「近く行って見に行くべ！」

ケイ

「そうだね！」

ステージの近くは物凄い爆音で地面が揺れていた。

完全に見入っていた。

2曲目は激しい曲調からスローテンポな曲調になった。

3曲目、4曲目は激しい感じの曲。すべて聞いたことのない曲だったので、おそらくオリジナルだろう。

走り抜けていく感じにコウキさんのステージは終わった。

リヨウ

「かけえね！」

ケイ

「やばいね！」

2番目の出演者が放送されるのと、ちょうどぐらいいにイベントのスタッフに2人は呼ばれた。

スタッフ

「レッドパープルさんそろそろ準備を…。」

リヨウとケイの組は4番目。以外と早めだ。

リヨウ

「あっ、わかりました。」

ケイ

「行こうか。」

リヨウ

「緊張する。」

ステージの裏手に回り、ギターなどを取りに行く。

ステージでは2組目のバンドが演奏している。コウキさんのアコギ1本とは違い、4人組バンドで、ベースやドラムの音が聞こえる。

さつきとは違うがとてもいい感じだ。なによりこのライブの出演者はめっちゃくちゃ上手い。

ケイ

「みんな上手くねえ!?!」

リヨウ

「俺も思ったわ! すごいね。でも俺っちもやれるだけやろう! 楽しもう!」

ケイ

「オツケイ!」

またスタッフから声がかかる。

スタッフ

「じゃあステージ横のテントに移動してください。」
もう2組目も終わったらしい。

リヨウ

「はえー! 緊張するー!」

テントに移動して、ギターをチューニングする。
スタッフ

「今やってるバンドが終わったら、紹介しますから、そしたらステージ上がっちゃって大丈夫ですよ。」

リヨウ・ケイ

「ハイ！」

微妙に声が裏返る。

緊張していた。2人とも。

あつとゆうまに3組目が終わった。しかし、緊張しすぎていて、どんな曲を弾いてたのかさっぱりで、音楽が耳に入っていかなかった。
テツロウ

「…続いては、初めて参加するバンドですね、レッドパープルです
！！」

スタッフ

「どうぞー！上がっちゃって！」

緊張したまま2人はステージの階段を駆け登って行った。

入ってくる音は、自分達が上がっている階段のきしむ音だけだった。

>君を消そうとする君へ<

作詞 ケイ

ハロー

この眼から見える世界は

僕にとって不思議な世界なんだ

電車にゆらり揺られ

窓から見た景色が

溶けてゆく流れてく

次の場所に止まる

開く自動トビラ

降りた人達が流れてく

あの額縁のようなトビラを横切る乗客だった人

意味もなく他人と競争

目的なんてないくせにさ

世界が在る意味なんてあるの？

僕がいる意味なんてないよ

世界が在る意味なんてあるの？

僕がいる意味になんないよ

そう思うことができた君は

救世主になれる存在なのかもね

拍手の音が聞こえる。

観客の音が聞こえる。

自分達が出しているギターの音が聞こえる。

段々と周りの音が聞こえてきた。

ケイ

「ヤッベー！！」

リヨウ

「ケイちゃん、俺、手え、震えてるっばい…。」

ケイ

「やるしかないよ！」

リヨウ

「いっっちゃうよー！！」

覚悟を決めた二人。

リヨウ

「ごーも！！レッドパープルです！よろしくお願いしまーす！！」
無難なすべりだし。

リヨウ

「このイベントね、初めてみたいなあ、そんな感じですけどお。自分達はね、路上ライブとかやってるんですよ。。。」
軽く宣伝。

観客シーン…。

ケイ

「なんでよろしくお願いしまーす！！」

…ワァー！！！！と観客の声援。

まずまず？のつかみだったと思う。

ここはこの勢いに乗るしかないとリヨウは思った。リヨウ
「イエーイ！！じゃあ聞いて下さい！！オリジナルです！！」

> ホントはね…。<

作詞 リヨウ

どうしよう…

誰にも言えないんだけどこの気持ち。。。。

アイツはどう思ってるのかなあ？

私は気持ち決めています！

私の考え違っていたら…

どう対処したらいいのかなあ？

わかって下さい！

大目に見て下さい

もし止められたとしても

私の中で決まっていたかモデス…

スイマセン！

最後に謝ります

これですむとは思わないけど

ごめんなさい

これで許してくれませんか？

1 曲目を唄い終わった。

パチパチパチパチ…と拍手が起こる。

ノートをめくり、2 曲目を唄い始めた。

>感謝罪<

作詞 ケイ

笑った顔が好きだから

君のことが好き

理由なんてそれでいいでしょ？

他にないの？つてさあ…

適当にしたくないから答えない

適当にはできないから言わない

言わないよ

でも怒った顔も好きかも

君のことが好き

ケンカなんかしたくないけど

たまにはつてそりゃ変か？

なんで今こうなっているのか

正直忘れました

でも離れる理由もないし

ぜんぜん嫌でもないし

いることが普通になつてるんだよ

いないとき苦痛に感じるかも

虜でソーリー

あとサンキュー

3 1 出番だ!!&1t:3曲目&4曲目>

2曲唄い終えたところで、少しトークを入れることにしていた。

ケイ

「いや〜!こんな大勢の前でやったことないんで、緊張してます!」
今はステージに上がった時よりは緊張がとけていた。

それはリヨウも同じだった。

リヨウ

「でも、1曲唄ったところでちよつと緩んだね。」

ケイ

「そうだね。えーと、時間もないんで次の曲いきます。」

リヨウ

「3曲目は、ゆったりとしたテンポの曲なんで、みなさん寝ないで
下さいね!」

ケイ

「寝ないからっ!」

>1111<

作詞 ケイ

繋がる手と手の中には

銀色した輪っか

サビることもない

割れることのない

それは儀式交わした証

どこまでも突っ走るのさ

ランナーズハイだ
終わることはない
やめることのない
けしてオーバーペースじゃない

近くにいるよ
いてあげるよ
そばにいてほしい
いてあげる

誰かと一緒にいる時に
こんな気持ちが生まれたら
そんな気持ちと隣の人を
ずっと守ってあげましょう
ぎゅっと抱きしめてあげましょう

シーン…
ゆっくりなテンポだった3曲目。盛り上がりづらい。
リヨウ

「…さあ！次で最後の曲となりましたあ！」
無理矢理いった。無理して上げた。
ケイ

「最後は、今日のライブの為に曲を作りました！まあエロ的なことを意識して作ったんですけど、聞いてください！」
リヨウ

「今日はありがとうございました！」
ケイ
「ありがとうございました！」

> 血球 <

作詞 リヨウ・ケイ

まんまるだと思ってた
地球は実際でこぼこだったよ
つかみドロコが無かったら
全部落ちて無くなる
アイツったら優しいなあ
でこぼこにしたのは僕ら
傷つけたのは僕らなのに

真ん中だと思ってた
僕は実際ちっぽけだったよ
こんな僕がやれることは
全部壊して無くす
アイツったら優しいなあ
どうしょもないこの僕を
情けないだけの僕なのに

自分の背中には自分では
よく見えないんだよ
そこに書かれた
「恥」の字を
誰か消してくれないか？

4曲目が終わった。

…ワーツ！！パチパチパチパ…。

観客の歓声と拍手の音が聞こえてきた。

その音しか聞こえてこない感じだった。

テツロウさん

「はい！ありがとうございます！レッドパープルでしたー！」

その声で自分達のステージが終わったことに気付く。

完全に意識はどっかに飛んでいた。

すぐに片付けをしてステージを下りる。

階段のきしむ音はもう気にならない。

下にはワサビのメンバーが待っていた。

ユウカさん

「良かったよー！うまいじゃーん！2人共！」

ケイ

「あざっす！」

照れながら言った。

リョウ

「ワサビのライブ、楽しみに待ってますよ！」

トモさん

「よっしゃ！頑張るべーな！？」

ユウカさん

「そうだね。」

アツさん

「そうだな。」

ヨシさん

「もちろん。」

トモさん

「そこはみんなで、オーツ！って言うでしょ！？」

…。

ワサビの出番は最後の方だ。まだだいぶ時間がある。

リョウ

「出番終わったからさあ、ちょっと屋台とか見に回るつよ。」
ケイ

「全然見れなかったしね。自分らでいっぱいっぱいで。」
出番を終えた2人。結果は良かったのか、悪かったのかはわからないが、いい手応えは感じていた。

32 緊張する？&1t・テレフォン>

ライブはいったん休憩に入った。休憩中はテツロウさんとシンゴさんのトークで間を繋ぐ。

テツロウさん

「いや、あつという間に休憩に入りましたねえ。この時間は僕ら2人のトークタイムです。」

シンゴさん

「夏のフェスに常連のバンドが主体ですけど、イベント初参加のグループが冬は多いですねえ。」

レッドパープルを含めた4組が初参加らしい。

シンゴさん

「ここに集まってくれた人は、もちろん観客の方々を含めて、最初は見ず知らずの他人じゃないですか。でも、こうゆうイベントがあつて集まれる、ライブがあつてきっかけが生まれる。ホントツ音楽つて素晴らしいですよね！」

テツロウさん

「いいこと言つてたけど、最後なんか聞いたようなフレーズだなあ

…。映画…?」

シンゴさん

「まあそれは気にせず、後半戦いきましょう！」

テツロウさん

「…そうですね。気になるけどそうですね。」

後半の組にワサビは入っているが、トリ前なのでまだまだ時間はあつた。テツロウさんとシンゴさんのアルマジロも聞きたかつた。

ステージでは後半、最初のグループが準備をしている。

ケイ

「ユウカさんどこにいんのかなあ？」

リヨウ

「ん〜、まだ出番じゃないからねえ。」

そんな話をしていると、前からコウキさんがやって来た。

コウキさん

「お疲れ！うまいじゃん！」

リヨウ

「コウキさんほどじゃないスよ。」

コウキさん

「ははははは！でもほんと良かったよ。」

ケイ

「ありがとうございます。コウキさん、ユウカさんち見なかったツスカ？」

コウキさん

「ユウカさん……。ああ、ワサビね。裏にいたよ、たぶんまだいるんじゃない？」

ケイ

「そうツスカ。あざツス。裏、行ってみる？」

リヨウ

「そうだね。まだ出番まで時間あるけど、行こっか。」

2人はステージの裏にある建物に向かった。

そこには談笑しているワサビのメンバーがいた。

アツさんが2人に気付く。

アツさん

「おお！何やってんのさあ。こっち来なよ。」

ケイ

「実は探してたんスよ。」

ユウカさん

「えっ？なんで？」

ケイ

「いや〜、まだ出番じゃないツスけど、ちょっと応援的な……。」「ユウカさん」

「応援つて、ウチらの？ハハッ！ありがと。」
リヨウ

「準備とかあるから、早めにいっところこうと思って。」

ユウカさん

「そうなんだ。ありがとね！」

いつものテンションで言った。

リヨウ

「ユウカさんつて、あんま緊張とかしないんすか？もう慣れたとか？」

リヨウはユウカさんにたずねた。

ユウカさん

「緊張はするよ。まだ出番が近くないからあんましわかんないだけだよ。」

リヨウ

「そうなんすかね。あんまわかんないッス。」

ユウカさん

「そっかあ。ん、そうだなあ、やっぱり大舞台に立つとするんだけど、ガチガチに緊張しちゃっていつも通りのパフォーマンスが出来ないので勿体くない？緊張するのって大事だと思う。自分に気合いが入ってるなあみたいのを感じられるんだ。でも、しすぎちゃうと大変なことになっちゃうから気をつけてる。そうならないように意識してる。ま、難しいけどね！」

トモさん

「おー！かっけ〜！ドキュメンタリー番組っぽかったよ、今。」

ユウカさん

「ウツサイ！」

トモさんが茶化しながら言うと、照れながらユウカさんは言った。

ヨシさん

「そろそろアルマジロじゃねえ。」

久しぶりに喋ったヨシさんにみんなが反応した。

アツさん

「出番近いけど、ちょっと見に行こうかあ。」
みんなイスから立ち上がりステージの前に向かった。

> テレフォン <

作詞 リョウ

珍しく早く終わった今日のバイト
これからどうしよう
やることも特にないな
ああ憂鬱だな
どっか行こう

一人で行くのもなあ
そくだ電話をしよう
みんなを呼ぼう

君に届く電波
君の手を掴んだ
君に届く電波
君の手を掴んだ

珍しく雨上がりの虹を見た
空に七つの色
一瞬の出来事
心におさめよう
みんなも見てるのかなあ？
そくだ電話をしよう

みんなに言おう

君に送る電波

君の手を掴んだ

君に送る電波

君の手を掴んだ

どんなに遠くにいたって

どんなに近くにいたって

光の糸が君を探すよ

光の糸が君を見つけるよ

君に届く電波

君の手を掴んだ

君に届く電波

君の手を掴んだ

君に送る電波

君の手を掴んだ

君に送る電波

君の手を掴んだ

33 楽&It:クライマー / クライヤー >

ケイ

「テツロウさん達って、夏のフェスとか常連なんですか？」

アツさん

「ってか実行委員だからねえ、毎回出てるよ。」

ケイ

「そういえば、実行委員って言ってたな。」

リヨウ

「やっぱうまいんすか？」

ユウカさん

「うん。超うまいよ。」

トモさん

「おっ！始まる。」

テツロウさんとシンゴさんがステージにでてきた。

パチパチパチパチ…

拍手する観客。

テツロウさん

「はい！アルマジロです！このイベントもそろそろ終わりに近づ

いてきました。まだまだ盛り上がっていきましょう！」

ワーツ！！

盛り上がる観客。

シンゴさん

「いいツスねえ！では楽しみましょう！」

アコースティックギターの音が会場に流れ出した。

2人はギターも唄も上手かった。

ケイ

「すげえうめえ…。」

リヨウ

「やべえ…。」

曲に聴き入るリヨウとケイ。

するとスタッフの人がやって来た。

スタッフ

「ワサビさん準備お願いします。」

ユウカさん

「もうそんな時間かあ。じゃあ行ってくるね。」

トモさん

「楽しみにしとけっ！」

リヨウ

「はい！待ってます！」

ケイ

「頑張ってください！」

ユウカさん

「じゃね〜。」

ワサビのメンバーは裏の方に向かっていった。もうすぐワサビの出番だ。

ステージ上のアルマジロは1曲目が終わり、2曲目を唄っていた。

リヨウ

「うめえなあ。」

ケイ

「だよね〜。」

そんなことをつぶやきながら聞いていると、ユウキさんを見つけた。近づく2人。

ケイ

「さっきはありがとうございました。ワサビのみんないました。」

ユウキさん

「いたっしょ？この次だよね？ワサビ。」

ケイ

「そうッスね。ってかもうそろそろこのイベントも終わりなんだな

あ。」

しみじみ…。

しみじみするケイ。

コウキさん

「まあ、今を楽しもうぜっ！」

ケイ

「そツスね！」

テツロウさんとシンゴさんのアルマジロが曲を唄い終えた、いよいよワサビの番だ。

アルマジロの2人はステージから降りて、今まで進行していた席に戻った。

テツロウさん

「はい。ありがとうございます！フウ、まだ息が整ってないんで、スイマセン。…えー、では次はワサビとゆう僕らのイベントでは常連のバンドの登場です！」

4人がステージに上がった。

準備をするワサビのメンバー。

リヨウ

「まだ始まんないよね？」

ケイ

「準備してるから、そうだけど。すぐ始まるっしょ？」

リヨウ

「ちよつとトイレ。」

小走りでトイレに向かうリヨウ。

…。

リヨウ

「はあー。戻んべ。」

トイレを出て、元いた場所に戻る途中、シンゴさんに会った。
シンゴさん

「おー。リヨウ君、探したよ。」

リヨウ

「あつ、シンゴさん。お疲れッス。どうしたんスか？」

シンゴさん

「最後にオリジナルバンドで唄うんだけどさ、それに参加してこないかなあと思って。」

リヨウ

「ホントッスか！？全然いいッスよ！」

シンゴさん

「そう言ってくれると有り難いよ。じゃあケイ君にも伝えといて。」

それとコウキ君見なかった？彼にも言おうと思っただけど。」

リヨウ

「それなら今、一緒にいるんで伝えときますよ！」

シンゴさん

「そうか！よろしく！」

スピーカーからライブハウスで聞いたことのあるワサビの1曲目の曲が聞こえてきた。

リヨウ

「あつ、始まった！じゃあ言っときます！」

シンゴさん

「よろしくね〜！」

ケイとコウキさんがいる場所に戻りさっきのことを伝えた。
ケイ

「おお！またステージで唄えるんだ！」

コウキさん

「最後まで楽しまなくちゃね！」

リヨウ・ケイ

「そツスね！！」

2人は声を揃えて言った。

>クライマー クライヤー<

作詞 リョウ

組み込まれた知識使い

人という山のイタダキに上がる

見晴らしがいいこの景色

人というフミダイ登って手に入れる

そこで自由を見つけた

わずか2畳のスペースは

アイツもコイツも乗せるには

狭すぎるとわかったんだ

悲しいことに僕には

登る道具は持ってても

下る道具は持ってない

突然目の前ぼやけて見える

そうかこれが涙なんだね

34 イベント終了&1t・叶えユメ>

ユウカさん

「すっかり暗くなりましたが、どーもワサビです!」

1曲目を唄い終えて、こう言った。

まだ普通では明るい時間だが、冬なので暗くなりはじめていた。本当にこのイベントは終わりに近づいている。

ユウカさん

「じゃあ2曲目、聞いてください。」

唄い始めが、ユウカさんのアカペラで始まった。

この人の声は透き通っているなあと、思う。

その声で聞こえてくる歌詞が頭に残り、心に染みる。

ジン…。

周りを見ると、なんと泣してる人がいるじゃないか!

音楽を聞いて、涙を流す人を初めて見た。

そして、それはユウカさんがそれほどの力を持っているということだった。

そんな風になりたいと思った。

そんな風に唄えたらと思った。

でもまだ無理。

だけど、いつか必ず…。

早くも3曲目に入った。

すると、テツロウさんが寄って来た。

テツロウさん

「もうそろそろワサビのステージも終わるから、裏に集まってくれないかなあ?」

オリジナルバンドに誘われていたので、そのこと言われた。

コウキさん

「じゃあ行こっか!」

ステージ裏に移動する。

自分達の時のステージより緊張はしていない。むしろ早くやりたくてウズウズする。2人共そんな感じだった。もちろんコウキさんもステージ裏には他のグループの人達もいた。

テツロウさん

「じゃあワサビのステージが終わったら、上がっちゃってください。楽器の演奏を頼んだ方達は持って上がってください。それで、説明いれますんで。曲はオリジナルなんですけど、すぐわかると思うんで。」

リヨウ

「そんなテキトーな感じなんスか？」

コウキさんにたずねた。

コウキさん

「そうだよー。俺も最初は驚いたけど、すぐ覚えられるよ。ほとんど繰り返したからさあ。」

リヨウ

「繰り返しかあ…。」

ケイ

「まあ、上がったらなんとかなるっしょ！」

リヨウ

「そだね！」

ステージ上のワサビは4曲目を唄っていた。この曲が唄い終わったら、オリジナルバンド・オリヅルの出番だ。

もうそろそろと思うと、やっぱり緊張してきた。

リヨウ

「うー、やっぱりドキドキしてくるわあ！」

ケイ

「俺もしてきた。」

コウカさん

「ありがとございました！では、続いてはオリジナルバンドの演

奏を聞いてください！」

テツロウさん

「じゃあ行っちゃってください！」

順番にステージに上がる。そして、ステージは出演者で一杯になった。

シンゴさん

「えー、このイベントもいよいよ最後の組となりました。今日は寒
い中、最後まで聞いてくださりありがとうございます！」

シンゴさんの説明の後、ステージ上のテツロウさんがしゃべり始め
た。

テツロウさん

「初めて冬にイベントを開き、寒いにもかかわらず、こんな沢山の
人達が来てくれました。これは成功と言って良いのでしょうか？」

ワーツ！！

観客は歓声をあげた。

テツロウさん

「ありがとうございます！では、最後です！オリジナルバンド、オ
リヅルの歌を聞いてください！」

夏のイベントに常連の出演者は、手拍子をし始めた。リョウとケイ
もそれを見て手拍子をする。

シンゴさん

「みなさん！手拍子お願いします！」

ステージに上がって来たシンゴさんが言った。

パツ、パツ、パツ、パツ…

次第に揃う手拍子。会場全体が一つになっていく気がした。

スタッフが観客の何人かにペンライトを配り、まばらな光が雰囲気
を作った。

ジャー…

そして、ギターの音が流れ始めた。

> 叶えユメ <

オリジナルバンド・オリヅル

この日この場所に集まった

熱き少年少女は

いつか大人になるだろう

きつと夢をみるだろう

叶えようその夢を

繋げよう未来に

叶えようその思い

繋げよう明日に

叶えようその夢を

繋げよう未来に

叶えようその思い

繋げよう明日に

35 衝撃！&It・いばら>t；

イベントは終わり、観客はいなくなり、出演者やスタッフだけになった会場。

テツロウさん

「今日はお疲れ様でした！」

一同

「お疲れした〜っ!!」

テツロウさん

「じゃあ片付けしてもらって、それが終わったら打ち上げの場所用意してますんで、参加する方はお願いします。」

リヨウ

「ひゃ〜！酒飲んで〜！」

ケイ

「まず片付けだよ、オッサン！」

みんなで立てたテントやステージをバラす。

トモさん

「打ち上げ行くべ？」

リヨウ

「行きますよ。ワサビのみんなも行きますよね？」

トモさん

「モチロンよ！」

ユウカさん

「じゃあ片付けなんて、すぐ終わらして行こお！」

ケイ

「よっしゃあ！」

テキパキと行動する。

シンゴさん

「若いつていいねえ…。」

テツロウさん

「だねえ…。」

ちよっとオツサンの2人は言った。

片付けは終わり打ち上げの場所に移動する。会場にわりと近いところで、リヨウは、名前は聞いたことがある、と言っていた。

テツロウさん

「今日はみなさん、お疲れ様でした！挨拶はこれくらいにして飲みましょう！かんぱーい！」

一同

「かんぱーい！」

みんな一斉に用意された食べ物に手を出した。

アツさん

「つてかさあ、レッドパープルは結成してどんくらいなの？」

ケイ

「えーと、もうすぐ1年ツスね。」

アツさん

「へえー。一年なんだあ。」

トモさん

「名前は誰が決めたのよ？」

レッドパープルの歴史を簡単に説明した。

リヨウ

「ワサビは誰が決めたんスか？」

トモさん

「それは、ヨシが。」

ヨシさん

「ワサビって、なんかロツクっぽくにゃい？」

またしても酔っ払いながらヨシさんは言った。

アツさん

「早えから！酔っの！」

トモさん

「ギャハハハハ！」

笑っているとユウカさんがつぶやいた。

ユウカさん

「みんな明日って暇？」

ケイ

「平気ツスよ。」

リヨウ

「俺もダイジヨブです。」

トモさん

「俺も平気。」

アツさん

「俺は夜からなら。」

ヨシさん

「俺も夜からあ。」

ユウカさん

「じゃあ明日、20時位から飲み会やらない？そのくらいから行ける？」

アツさん

「20時なら余裕だよ。」

ヨシさん

「余裕！」

ユウカさん

「じゃあ決定ね。場所はいつものトコで。2人はみんなと一緒にくればわかるからさ。」

リヨウとケイを見て言った。

ケイ

「俺らだけの打ち上げツスカ？」

突然提案したユウカさんにケイは聞いた。

ユウカさん

「んー、まあそんなところかな。」

リヨウ

「いつものトコってどこですか?。」

イベントの打ち上げでユウカさんが言っていた飲み会の日になった。2人は言われたとおりにワサビのメンバーと飲み会の場所に移動していた。

アツさん

「駅から近いよ。」

トモさん

「ほら、あそこだよ。」

ユウカさんの知り合いの居酒屋らしい。中にはすでにユウカさんがいた。

リヨウ・ケイ

「こんばんはッス。」

ユウカさん

「こんばんは。ごめんね。先に飲んじゃった。」

ヨシさん

「じゃあ飲むか。」

トモさん

「好きだなあ。」

アツさん

「とりあえず乾杯しようぜ。」

みんな席に着いた。

トモさん

「えーと、イベントお疲れってことで乾杯でいいの?。」

ユウカさん

「まあ…、それで。」

アツさん

「じゃあ乾杯！」

一同

「乾杯！」

ユウカさん

「乾杯したすぐで悪いんだけど、ちよつといいかな？」

ヨシさん

「どうした？」

中ジョツキの生ビールを一気に飲み干したヨシさんが言った。

ユウカさん

「実はさ…、実は私、海外にちよつと行こうと思ってるんだ！」

一同

「えーっ!？」

> いばらく

作詞 ケイ

本当にやりたいことをやる為に

やりたくないことをやって

本当に好きなことをやる為に

嫌いなことをする

歩く道はいばら道

進む道はいばら道

僕に必要なのかと何度も思った

打ち明けても返ってくる言葉はわかった

大丈夫だよって

僕は必要なかと何度も思った
そのたびに自分に言い聞かせていた
大丈夫だよって

「あなたの存在は大きかったです」
その言葉に救われました

みんな歩いてるいばら道
楽な道なんてどこにもないよ
良いか悪いか決めるのは
自分自身だから

トモさん

「どうゆうことだよ!？」

ユウカさんは自分が言った理由をゆっくりと話始めた。

ユウカさん

「いきなり海外に行くって言われてもわかんないよね?...実はアメリカで歌の勉強がしたいの!」

アツさん

「歌の勉強って、発声練習とかそうゆうの?」

ユウカさん

「そうゆうのも教わりたいし、本場の熱って言うのかなあ?そうゆうのも感じたいの。」

トモさん

「いきなり言われても、どうすりゃいいかわかんねえって。」

ユウカさん

「だよね...だからワサビは...。」

アツさん

「解散になるってことだな。」

ユウカさん

「...。」

解散と言う響きに誰もが黙ってしまった。

ケイ

「...期間とかがって決まってるんですか?」

沈黙の中、ケイが話した。

ユウカさん

「はつきりとは決めてないんだけど、自分が納得するまでいたいだ。お金は仕事でためたから多少はいられるし、向こうで仕事も見つけるよ。」

すぐにトモさんが言った。

トモさん

「いきなり行って、住むとことか、仕事とか、アテはあんの？」

ユウカさん

「特にないけど…。」

トモさん

「危なすぎねえ？知り合いとかいないのけえ？」

ユウカさん

「いないけど、一人でやってみる。もう一人でやらなきゃいけない気がするんだ。目指してるものの為に。みんなもやりたいこととかあるでしょ？ものすごい自分勝手だけど、こんな私を許してください…。」

また沈黙になってしまった。

リヨウ

「みなさんの目指してるものって何なんですか？」

今度はリヨウが沈黙を破る。

ユウカさん

「…私はやっぱりプロの歌手になることだね。プロになって、みんなの目標になる存在でいたいんだ。」

ユウカさんは力強くハッキリと言った。

リヨウ

「他のみなさんは？」

アツさん

「俺もやっぱりプロのギタリストだねえ。自分が理想とするギタリストになりたいねえ。」

アツさんの決意はみんなに伝わった。

トモさん

「お前ならダイジョブだ。」

ケイ

「トモさんはなんすか？」

トモさん

「俺？俺は…。」

アツさん

「店出したいんだろ？」

ケイ

「えっ！？そうなんですか？」

トモさん

「出せたらなあ、みたいな感じだよ。」

リヨウ

「なんか、カツコイイツスね。なんの店ツスか？」

トモさん

「えっ？まあ、服屋みたいな。」

リヨウ

「ホントツスか！？頑張ってくださいよ。」

トモさん

「まあ、やれるだけやってみるわ！」

ケイ

「ヨシさんは？」

顔が真っ赤になったヨシさんに聞いた。

ヨシさん

「俺はねえ、…役者かな？」

小さい劇団に入っていることをその時初めて知った。

ユウカさん

「2人はなにかあるの？」

突然、ユウカさんはリヨウとケイに質問した。

リヨウ

「ん〜、特にまだ…。」

ケイ

「俺もツス…。」

アツさん

「まあさ、急いで探す必要もないし、すぐに見つけるのもいいんだよ。大事なのは本当にそれがしたいかってことだよ。」
深い…。なんて深い言葉だ…。と、2人は思った。

トモさん

「じゃあラストのライブでもするかあ！」

アツさん

「やるかあ！」

飲み会はライブの話しで終わった。

そのライブにレッドパープルも出演することになった。

ケイ

「ワサビが解散するとはねえ…。」

リヨウ

「ビツクリしたわあ。」

ケイ

「みんなやりたいことがあったんだね。俺はまだわかんないなあ…。」

リヨウ

「まあ、俺もまだわかんないんだけどさ、焦らず、ゆっくりと、人生楽しみながら見つけてもいいんじゃないじゃね？アツさんも言ってたべよ。」

ケイ

「そだね。たまにはいいこと言うね。リヨウちゃん。」

リヨウ

「ははは。…たまにが余計なんですけど。」

2人は笑った。

> 温度差<

作詞 ケイ

君の世界とこの世間に温度差が生じたって
この世の中を良くしたいって思うことはやめはしない
君の思いと他の意見に温度差が生じたって
占いでは良いことしか信じない夕子だから

今考えていること感じることに周りの何かと温度差が生じていて
ただ無理だヤメロと言う何かはしたことないのに言っている
ホントの本気でやったのか？

ダメでもどん底まで落ちてみたのか？
倒れるまでやったのか？

血を吐くほどに打ちのめされたのか？

君の世界とこの世間に温度差が生じたって
この世に働きかけてくことに無駄なんてない
君の思いと他の意見に温度差が生じたって

ノーテンキって言われたって前向きに生きている
やりたいことをやったって
やりたいものになったって

何かに必要とされるならそこに君の意味がある
君の世界とこの世間に温度差が生じたって
誰かに必要とされたなら君がいる意味になる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8127c/>

ストリートストーリィ

2010年10月25日22時10分発行